山岳

第二十九年
第二號

山岳

第二十九年第二號

目次

（第二十九年第二號　昭和九年十一月）

本欄

慶長年間の朝日連峯通路に就て　佐藤榮太　一頁

雜錄

信濃山岳傳說考　磯部杏坡　一三
北アルプスの紅葉風景　中野山堂　四三
（笠谷・笠ヶ岳・下佐谷及び其他の諸谷）
山梨縣對靜岡縣、小富士及富士山頂爭奪戰評論　六一

圖書紹介

邦譯チンダル（松方三郎）――「臺灣の山」と「千島の山」（伊藤秀五郎）――リュックサック（額田敏）

會報

定例理事會並に臨時役員總會(七六)　第九回關西小集會記事(七七)　有志晩餐會記事(七八)　關西有志懇談茶話會記事(七九)　第六十二回小集會記事(七九)　新入會員紹介(八〇)　會員訃報(八一)　退會者(八二)

圖版並に挿圖

朝日古文書　其一　一〇一頁
〃　其二　一〇二
〃　其三　一〇二
朝日連峯要圖　一〇二

カット　坂本直行

慶長年間の朝日連峯通路に就て

佐藤榮太

一、序

羽越國境に聳立する朝日連峯が登山地として開發されたのはまだ近年のことである。其の後營林署や地元で熾んに道路を切開いたので今は登山も非常に樂になつて、朝日礦泉から大朝日までの往復登山は僅か半日の行程に短縮されて了つた。然し連峯の主脈縱走は途中施設の不備や天然の關係等に依り未だ相當の難コースであつて一ケ年の縱走者はまだ〳〵幾組と數へる程しかない。

然るに現在に於てさへ相當の難コースたる連峯主脈の處々に舊い道形が明かに認められるのは縱走者の等しく驚異を感ずる處であつて、西朝日の東面と以東岳の南面最低鞍部の通稱狐穴との間及び以東岳と戸立山との間には不用意にしても尙見逃すことのない程明瞭に刻まれてゐる。殊に狐穴の北偶小丘には遠くより望む時も明瞭に電光形の道形が現在の道の右手に存在して居る。その實、現地は一面の腰邊までの笹藪であるが詳細に調査する時確實に約三尺ばかり斜面を掘下げた跡が明かである。

幾日かの間草に臥し岩を枕にして雨露と闘ひ藪に苦しめられて縱走を終つた後、昔の人の堂々たるあの交通の跡が不思議にも腦裡にこびり付いて探究慾をそゝる。海拔千八百米乃至千五百米の蜿蜒たる高山上を何時の時代如何なる要があつて交通しなければならなかつたか。

二、開鑿年代と當時の狀勢

米澤事情を記した『米府鹿の子』に上杉の將直江山城守兼續が米澤から朝日を越えて庄內へ通ずる新道を開いたことが僅かに見えて居る。開鑿の年次や、其の狀況等は記されてゐないが、後に記す現存の古文書や當時の狀勢に依つて、慶長三年正月上杉景勝が會津に移封され、直江山城守が其の老臣として米澤に在城するようになつた初年の夏の事業なることが推定出來る。扨て何故に斯る嶮難の地を殊更に通路を開かなければならなかつたか。茲に少しく當時の狀勢を見よう。

庄內（現在の東西田川飽海の三郡）の地は累代武藤氏の根據地であつたが、義氏の代に及んで惡虐無道の振舞が多く、世に惡屋形と云はれ人心次第に離反するに至つた。是に乘じ周圍の雄藩は互に兵を出して庄內を從へんとし、殊に山形の最上出羽守義光と越後上杉景勝の部將村上城主本庄越前守繁長は庄內を中心にして常に爭ひが絕えなかつた。斯くて天正十一年三月義光は義氏の將前森藏人等を誘つて叛旗を飜さしめ、俄かに義氏を居城大浦城に攻めて之を亡して了つた。茲に於て其の臣等相謀り義氏の弟丸岡兵庫頭義興を迎えて主としたが、部下の人心定らず、反覆常なき有樣に、義興は本庄繁長に援を求め、其の二男千勝丸を養つて義勝と稱し嗣子としたが、同十五年十月、最上義光は、武藤氏の部將東禪寺筑前守等と共に義興を攻めて之を殺し、養子義勝は僅かに免れて

小國城に逃れ、玆に武藤氏は全く滅びて庄内は一時最上氏の勢力下に置かれることゝなつた。

我子義勝を逐ひ出された本庄繁長は大いに怒り、翌天正十六年八月僅か三千の手兵を提げ、葡萄峠を越えて庄内に侵入し、反將東禪寺筑前守、同右馬頭兄弟並に最上氏の守將中山玄蕃光直等三萬の大兵と大いに千安河原に戰つて之を敗り、東禪寺兄弟は戰死し中山光直は逃れて山形に走つた。此の時豐臣秀吉天下を一統し命を發して干戈を納めしむるに至り、以後庄内は全く上杉家の勢力範圍となり、流石の最上義光も爾來全く庄内から手を引くの餘儀なきに至つたのである。

慶長三年正月、上杉景勝は蒲生氏郷の死後其の舊領を承けて越後より會津に移封され、會津四郡、仙道七郡及び長井田川櫛引、遊佐並に佐渡三郡を以て百二十萬石を領することゝなり、上杉の名將直江山城守兼續は米澤及び庄内を合せ三十萬石を賜ひ米澤城に鎭し、斯くて出羽の驍將最上義光と境を接することになつた。

由來上杉氏は早くより豐臣氏と好み深く、最上氏は德川氏に恩顧あり、豐臣氏に對してはむしろ恨みさへ持つてゐた。加ふるに領地に於ては以上の如く庄内を中心として長年爭ひ來つた間柄である。慶長三年八月、豐臣秀吉薨ずるに及び、天下の人心自づと二分して物情騷然たる折柄、上杉氏は豐臣方に最上氏は德川方に與したのは必然であつた。

斯る狀勢の下に於て、庄内及び新に米澤を領した上杉氏の經營は其の苦心を想像するに難くない。卽ち上杉氏の第一の敵は最上氏である。米澤と庄内の中間村上最上の地には宿敵最上義光が蟠居してゐる。隨つて其の連絡には會津から越後に出て庄内に向ふか、小國から村上に出るかの二途あるのみであるが、比較的近い小國越えにしても現在の如き立派な街道は無く幾山川を上り下りしたものである。

一、大里峠（尾折峠）は玉川に西方の國境也。自是越後海老江、淡島、佐渡正面に見る。則是を新道と云、大永元年七月開之、古道は又自是北にあり、越後の關峠より某峠を越え金丸に下り小國川の裾を渡つて八ツ口村へ着き越戸（コヘド）に上り、興庭山を越え小渡へ下り朝日川を渡り、伊佐領を經て白子澤に至り森越御舘を過ぎ、小坂或は平地を取る者は小松へ出、或は山路を取る者は田澤に出るなり、是則古歌の條の理なり。

一、興庭山此背西の山腹に越戸村あり、上古の越後街道あり、古歌あり曰く

戸を越て朝日わたりをいさ白子
森越舘過ぎて小坂に　（米澤里人談）

右の如くであつたから、何れをとるにしても當時に於ては多大の日數を費さなければならず、强敵最上氏を前にしては一朝有事の場合少なからぬ不安を感じなければならない。玆に於て米澤及び庄内を直接この配下に持つ直江兼續は、朝日の主脈を越えて一路直ちに庄内へ達する通路開鑿の大土木事業を起したのである。

三、朝日山道の經路

扨て朝日の間道は如何なる經路を選んだか。現今殘る處は僅かに一部分であつて、前述の以東戸立間及び以東岳の南面と西朝日東面は明瞭に見られるけれども、其の他は多く籔に覆はれ風雨に崩れて、それと見定め難く、且つ當時の有樣をしのぶべき古記錄等も發見されてゐない。私は始め其の地形上、野川を遡行して平岩山に登り大朝日より以東への主脈を縱走して、更に戸立、茶畑を經て皿淵澤附近に下つたものかと想像し、朝日礦泉の古川氏や野川及び大井澤方面等の山仕事に從事する土地の人達に此の道形を尋ね求めて居たのであつた。然るに此

の通路は南は御影森山の南側をからんで葉山に向ひ、北は以東より戸立山に延びて更に遠く高安山の北方兜岩附近に道形の遺存するを聞き、豫想以上に延長の大なるに一驚を喫したのである。更に私は過般葉山山麓の草岡村に殘る當時の古文書を發見するに及んで、愈ゝ此處を根據にして葉山に登り次で朝日に向つたものなることを確認することが出來た。

庄内すく道御小屋の御番いたすに付ては山におゐて檜物材木かり以下諸役令免許候尤田地迄も不抱百姓にあらざる者これあらばいか程も引うつし無油斷御番可仕候たれ成ともよこあひそのさわり致能まじき者也

以上

慶長四　正月廿六日　　春日印

源右工門とのへ

（朝日古文書其の一參照）

文中の春日は上杉藩米澤奉行及び郡代たりし春日右衞門元忠であつて草岡村源右衞門なる者に所謂庄内新道の番人を申付其の役得として葉山に於ける諸權利を免許したものである。

猶まげし役の儀ものがは入に而仕候分は其身に申付候以上

庄内新道に居申候源右工門猶以久迄も引越御小屋の御番堅固に可仕候由申に付て野河山々川共に一圓預置候

彌々御馳走可仕者や

慶長四　八月十三日　　春日印

源右工門殿へ

（朝日古文書其の二參照）

葉山には葉山神社鎭座し古來相當の信仰登山者あつたらしく、先づ此の道を利用して山道を開くことが適當な

案内者を得る上にも便利が多かつたことゝ思はれる。現在參謀本部五萬分の一圖上葉山神社より西北燒野平に向つて延長してゐる點線道は當時の名殘でなければならぬ。

以東より北方は兜岩に道形の存することに依つて大鳥湖畔へは下らずに戸立、茶畑、芝倉、葛城、高安等の山々を連ねたものであることが判るが、兜岩からは右方八久和に下つたものか左方繁岡に下つたものか未だ確める機會を得ない。或は八久和部落は庄内方面の起點であつて通行の際の人夫を此處に駐在せしめ、現在の部落はそれ等人夫の土着したものではないかとも想像される。

以上の經路卽ち草岡より葉山に登り御影森、大朝日、寒江、以東、戸立、茶畑、葛城、高安等二十數座の山々を連ね八久和或は繁岡に下る間、今地圖上にて目測するに連嶺少くも三十里の行程はある。然も三百三十餘年後の今日尙明瞭に殘るあの立派な電光形の道形を見ては可成りの大工事だつたことがうなづかれ、軍馬軍兵の往來も相當あつたことを想像するに難くない。尙之等の工事は全く秘密裡に施行されたものと思ふと一層驚異である。

四、慶長の役と朝日間道

此の通路開鑿に依つて米澤と庄内との距離は著しく短縮され、上杉氏にとつて多大の便益を得るに至つたことは必然であるが、やがて慶長五年天下分目の關ヶ原合戰起り、上杉氏と最上氏は玆に再び干戈を交ふるに及んで、此の間道は一層の重要性を帶ぶるに至つたことは想像に難くない。以下少しく關ヶ原の餘波戰たる上杉、最上兩氏の合戰を概觀しよう。

慶長五年九月五日、米澤城主直江山城守兼續は兵を三手に分け自ら將として中央軍を卒ゐ米澤を發して、長井、荒砥を進軍、最上義光の屬城たる畑谷城に向ひ、右翼軍は本村親盛、横田旨俊、篠井泰信等を將として中山口より上ノ山城に向ひ、左翼軍は中條三盛の兵を以て宮宿左澤方面に進發した。直江兼續の中央軍は十三日畑谷城を攻め、城將江口五兵衛光堯戰つて之に死し、兼續は進んで長谷堂城を攻圍した。城將志村高治克く禦ぎ、義光は楯岡光直清水義親等をして之に應援せしめ勝敗容易に決せず。斯る折柄豫て直江兼續の牒報を受けた庄内東禪寺城主志駄修理義秀及び大浦城主下次右衛門吉忠は、最上川口及び六十里越より相呼應して進擊し最上氏の背後に出でゝ行く〳〵其の諸城を攻め落し、谷地、寒河江、白岩を降して果ては中條三盛の軍と合し左澤、山邊に迫り、義光の本據山形城も既に危しと見えた。流石驍勇の義光も大いに恐れをなし其の子義康をして援を伊達政宗に乞はしむるに至つた。政宗は叔父政景に三千の兵を授けて赴き援けしめ、斯くて義光は伊達の援兵と合して廿九日兼續の兵と大いに長谷堂城外に戰ひ直江の部將上泉泰綱を打取り自らも亦兜の筋金に銃丸を受けた程である。

戰正にたけなはの十月朔日、關ヶ原に於て西軍大敗の飛報が兼續の陣營に到達、茲に於て兼續は天下の大勢既に決したるを覺り軍を納めて米澤に引揚げ戰は一先づ一段落を告ぐるに至つた。此の時庄内より進擊した志駄義秀は逸早く逃れて東禪寺に歸つたが、谷地城を守備して居た下吉忠は飛報の到來したるを知らず、遂に最上軍に捕虜となり後義光の旗下に屬することゝなつた。

東禪寺に逃れ歸つた志駄義秀は河村長藏と相謀つて更に抗戰の準備を怠らず、義光は降將下吉忠をして荐りに之を誘降せしめたが二人は敢て屈する色もない。茲に於て義光は志村高治をして狩川、余目、藤嶋諸城の戰備を整へしめ、更に嫡子修理大夫義康を總大將として月山越にて庄内に進擊した。先づ狩川にて部署を定め義康自ら

は里見越後、楯岡豐藏等を卒ひ、降將下吉忠を先鋒として大手口に、義光の三男清水義親は楯岡甲斐、氏家左近將監等を卒ゐ、東方砂越口より、北方よりは志村伊豆、鮭延典膳等鳥海山麓の菅野城を落して東禪寺城に進擊、斯くて折重つて東禪寺に亂入した。志駄、河村克く禦ぎ流石の大軍も容易に之を拔くことが出來なかつたが、下吉忠の勸誘に依つて遂に和を結び三月四日（或は四月廿四日）城を開け渡して河村は父彦左衞門の領地佐渡へ、志駄義秀は米澤に赴き玆に全く出羽合戰も局を結ぶに至つたのである。

以上が關ヶ原の役當時に於ける上杉對最上合戰の概況である。

始め慶長五年三月上杉景勝石田三成と結んで兵を集むるに當り、上杉の將直江の軍使は朝日山中を通つて頻りに其の所領たる庄内の東禪寺(酒田)、大浦(大山)の諸城と往來した。此の事を逸早く最上義光に注進したのは朝日岳神社の別當大沼（西村山郡大谷村）の大行院である。依つて義光は之を賞し今後も永く朝日の別當として丹精を抽んずべしとの左の如き書付を下して居る。

今度景勝軍勢朝日山林下間道伐開亂入之旨令注進條神妙之至仍任舊例朝日別當永令修勢國家鎭護可抽丹精者也

慶長五年八月一日　　義光花押

大沼別當　大行坊

庄内軍が戰起るや、逸早く最上軍の背後に進出して獨り向ふ處敵なき有樣の目覺ましい活躍を爲し得たのは、一に此の朝日の間道に依つて本軍との敏捷な連絡を爲し得たからではあるまいか。更に志駄義秀は戰終つて其の退路を斷たれるに至つたにも係らず直ちに此の間道より東禪寺へ歸城し、庄内の動搖を靜めて最後の決戰を試み

ることが出來たのである。

五、志駄義秀の朝日越考

北陸の驍將佐々成政の沙羅々々越えは我國戰史上將又交通史上有名な物語であるが、わが東禪寺城の勇將志駄修理亮義秀の雪中朝日越えは殆ど知られてゐない。以下唯一の通行記錄として志駄義秀の朝日越えを考證して見度いと思ふ。

『山形縣史』慶長六年辛丑三月四日の條に左の如く記されてゐる。

是より前志駄修理義秀酒田城を守り敢て屈撓せず、最上義光、男義康、志村高治等をして之を攻めしむ。秋田實季由利の諸將と來り會し四面攻擊す。降將下吉忠義秀に諭し開城退却せしむ、是の日義秀城を開き朝日山中を過き米澤に旋る。義光乃ち高治をして酒田城を守らしむ、義光又小野寺義道を横手城に攻めて之を降す、是に於て東國全く定る。

以上に對する引證として

（志田系圖）

修理義秀　景勝公御代庄内大寶寺ノ城代命之後庄内酒田城ニ移ル、會津ヱ御國替之上秩五千石賜之、慶長五年庄内擾亂ノ時翌年三月四日迄相抱謀略ヲ以城ヲ退ク、寛永九年八月十六日卒ス

（寄合帳）

庄内新路案内仕ニ付而役儀用捨之書付春日右工門方被出候、今以其通ニ候間如先代役儀等令免許者也

慶安四年十月十二日　　朝　岡　判
　　來　次　判

二郎右工門　（草岡村）
與三右工門
甚右工門
平　内
（此四人ハ志駄義秀退却ノ節山中ノ案内者也）

右に依れば志駄義秀が東禪寺城を捨てゝ米澤に逃るゝに際し朝日の山道を通つたと斷じ、寄合帳にある宛名草岡村四人の者を其の際の案内者なりとして居るが、慶長六年以後慶安四年迄は五十三年の日子を閲し、而も文中に先代の如くとあれば之等四人が案内者に非ざるは明かであつて、尚又其の先代を案内者とするも果して志駄義秀の案内者とするは早計に失すると思はれる。玆に私は左の文書を示す。

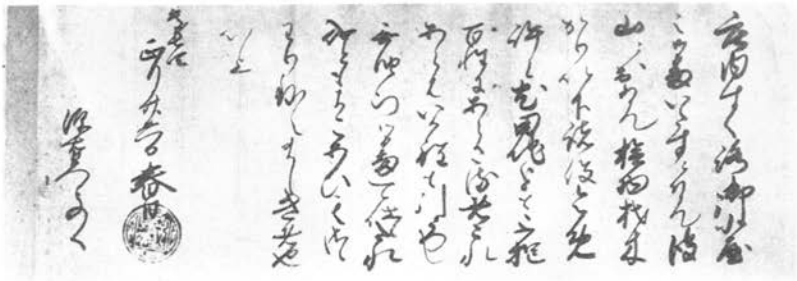
庄内直路案内仕ニ付而春日右工門方萬役儀用捨の判形見屆候於以來ニ檜物材木框師役狩まさかり役如前々之令免許候幷野川入山川共ニ一圓源右工門ニ預置所如件

慶安四年十月十二日　　來　次　印
　　朝　岡　印

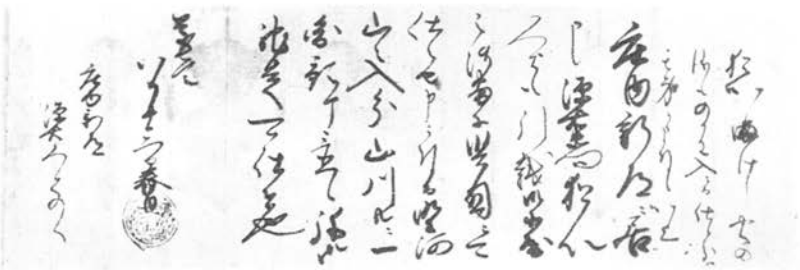
草　岡　村　中

（朝日古文書其の三參照）

之を要するに新路開鑿の當初は源右衞門一人を番人として山の諸權利を許して居たが、慶長五年の變起り、上



朝日古文書　其の一



朝日古文書　其の二

朝日古文書　其の三

杉藩では此の山道の重要性に鑑み更に幾人かの番人を追加して警戒に當らしめて居たものらしい。斯くして五十餘年を經過し慶安四年に至つて、草岡村と之等の人の後繼者との間に從來の諸權利に就て紛糾を生じたる結果、米澤藩にては『役儀前々の如し』と裁定し双方に下附したる判決書と見るのが至當ではあるまいか。但し東禪寺開城の後如何なる經路をとつて米澤に赴いたかはつきり記錄が殘つてゐない以上、或は此の時も朝日越をして居ないとは限らない。

庄内遊佐郷の郷士菅原左馬介政次が慶長十四年四月山之仕書一通を自記して其の子次右衞門に與へた。其の中に左の如く記されてゐる。

一、慶長五年ヨリ弓矢出申候、信田様ハ最上陣ニ被存立候ハ九月十一日、御陣ヲ被爲引候は同閏十月四日ニ而御座候、大浦下殿者最上へ御心替被成候、信田様ハ川之口モ六十里モ海道不罷成候故櫛引大鳥ノ切通ヲ御歸被爲候、菅原左馬介ハぢたい山本ノ者ニ而候へバ切通ノ御先立御奉公申上候へバ加增百石被下候事、加様ニ御忠進申候、其後慶長六年辛丑四月二日ニ鮭延典前殿先馬ニ而下口ヨリ菅野城ヲ御セメ被成候へ共菅野ハ落不申候、同十一日ニ菅野砂越ノ人數は東禪寺へかさなり申候而同月廿日に信田様御出被成候而永井へ御越候事

之に依つて志駄義秀は最上陣より東禪寺へ歸城の際こそ朝日越の險を敢行してゐることが明かである。卽ち關ヶ原の情報至るや形勢全く逆轉して、最上勢の爲に逸早く最上川口及び六十里越の兩街道共封鎖され全く庄内への退路を斷たれて了つた爲に、義秀は直江の妻と共に一先づ米澤に赴き次で朝日山中を越えて東禪寺へ歸城したものである。菅原左馬介の記錄は自らの實見體驗を記述し其の子に申送つたものであつて信ずるに足るものと思

ふ。

關ヶ原の敗報陣中に達し、直江兼續が長谷堂城の圍みを解いて米澤に引揚げたのが十月朔日、志駄義秀が朝日を越えて東禪寺へ歸城したのが閏十月四日、此の間約一ケ月、現行陽曆にすれば十一月から十二月の候である。あたかも山岳氣象の最も險惡な此の季節に於て庄内の狀勢を案じつゝ、殘兵を引具して行程三十里の此の高山上を辿る志駄義秀の有樣は如何であつたらう。雪量の多い朝日山系は此の季に入れば積雪既に數尺に達する。連日の吹雪も山上では珍らしくない。今日私達は科學の粹を盡しての山登りに於てさへ此の季の登山は最も危險としてゐる。當時山中には如何なる設備があつたか、義秀は如何なる用意の下に之を突破したか。今私達の最も知らんと欲する處であるが何等詳細を知るべき古記錄の發見されないのは遺憾である。（完）

參照地圖　五萬分ノ一

赤湯、手ノ子、朝日嶽、大鳥池

備考

東禪寺	現在ノ酒田市
大浦	大山町
大寶寺	鶴岡市
米澤	舊米澤領卽ち置賜一市三郡
永井	置賜地方の舊稱
最上	村山地方一市四郡
小國城	西田川郡福榮村にあり

雜錄

信濃山岳傳說考

磯部杳坡

美鈴刈る信濃國は、崑崙樺太兩山系の會合するところと云はれ、正に日本本島の背梁と稱へられてゐる。加之富士火山脈が南北に走り、一國の殆ど三分の二は山岳を以て占められ、國の形狀まで自ら山といふ字に似てゐると云はれてゐる。主なる山脈は、天龍木曾二川の分水嶺をなし、駒ヶ嶽を主峯とする木曾山脈と、天龍大井二川の流域を分ち、赤石嶽を主峯とする赤石山脈、及び西部國境に連亘して、御嶽、乘鞍嶽、燒岳等の火山を有する飛驒山系とである。國が全體として高いのであるから、人口聚落の町村も多く高地を占め、四圍悉く峻峯嶮嶽を繞らしてゐるので、至る所眞に山國の感が深い。

かうした地形の信濃が、驚くべき多數の優秀なる山嶽傳說に惠まれてゐるのは、蓋し理の當然で、我が國山嶽傳說の種々相を網羅して餘りありの慨がある。依つて一般山嶽傳說考究の一方便として、こゝに特に信濃一國の山嶽傳說を撰んで、少しく考察したいと思ふのである。固より各國各地方によつて、夫々鄕土的色彩の豐なる特異の傳說を生んでゐるのであるが、所謂傳說學的分類によれば、その細目は兎に角、大綱に於て、これらを幾つかの部類に分けることが出來、從つて豐富なる信濃傳說を以て、各部類を代表させるものも無理ではなからうと思はれる。

神馬傳說

その數總て二百數十の信濃の口碑傳說の中、十大傳說として人口に膾炙してゐるものは、物草太郎、善光寺緣起、刈萱石童丸親子地藏、姨捨山、戸隱山、鬼女紅葉、諏訪神、寢覺の床、有明山安曇平、そして駒ヶ嶽の神馬の諸傳說である。が、これらの中その雄大なる構想に於て、且つ又神國日本にふさはしき點に於て、信濃山岳傳說の白眉とも稱すべきものは、かの駒ヶ嶽の神馬傳說であらうと思ふ。蓋し多くの山岳傳說に於ては、その關するところ一山一峯に限られ、その場面も比較的狹少なる範圍に限定されてゐるが、この駒ヶ嶽傳說は實に五つの山岳にかゝはり、結構の雄大壯烈、他に比類なきものである。

餘りに有名な傳說ではあるが、概說すると、その昔那須國造が、八溝山の八狹大蛇を退治する時、武甕槌神の御魂から生れ出た白馬の天津速駒に打ち跨り、乘鞍嶽から天安鞍を、槍ヶ嶽から天日矛を、立山から天廣楯を夫々借り受けて、首尾よく目的を達した、と云ふ。この白馬は双肩に銀色の翼を有し、常に天空を翔け廻り、夜は駒ヶ嶽の絕頂に眠るのを常とし、しかも今日猶時折姿を現すとさへ云はれてゐる。

抑ゝ山岳の雄姿とそこに生起する諸現象とは、古代人の間に山岳を畏怖の對象とするに十分であつた。だから山岳は常に神と結ばれ、又神の使たる神馬とも因緣づけられたのである。かの速駒傳說以外にも、神馬傳說と稱すべきものに、上水內郡蟲倉山の駒の馬屋といふ岩窟に棲んでゐた神馬、五丈ばかりに見える長尾の小さい神馬の傳說がある。この他善光寺境內駒返橋の阿彌陀如來の駒返し傳說の如く、平地に於ける神馬傳說もあるが、こゝには凡て割愛する。

開山傳說

前述の如く素朴なる山岳崇拜は、古代人の間に廣く行き亙つてゐた。だから山岳が雄大峻嶮なればなるほど、彼等の畏敬の對象となり、これを敬遠して猥りに

山中へ入ることをしなかつた。かくて山岳は幾久しき歳月の間、殆ど絶對神秘境として放置されてゐた。

然るに欽明天皇の朝、初めて百濟の佛像が傳來した。そしてやがてかの王城を出でゝ山中に修業悟達した釋迦の自力思想の佛敎が入つて來た。かくて當初物部氏の排佛思想に打ち勝つて、佛敎がわが本土に根を張るに至つて、自力の根本思想は、佛者の固き信念となつた。彼等にとつて自力修業道の精神鍛錬の道場として、人跡未到の峻嶮なる山岳を拓き、そこに心身練磨の最難行を決行する以上に、よき悟達の道はあり得なかつた。而も中世わが國の佛敎は、總て唯一自力聖道門であつたから、平安朝時代に比叡山を開いた天台の最澄（傳敎大師）と云ひ、高野山を開いた眞言の空海（弘法大師）と云ひ、その他名だたる高僧知識は、夫々各地の處女峯を開拓して、そこに不朽の名を殘してゐるのである。

さて佛敎傳來の當初に於ける崇佛排佛兩派の反目は、その後表面的には崇佛派の勝利となつたけれども、由來神國日本に根强い敬神思想とは相容れぬ崇佛思想であるから、陰に陽に排佛思想の脅威、少くとも邪魔があつた。そこで最澄、空海、僧行基等は所謂本地垂跡の說を稱へた。卽ち神佛は元これ同體にて、日本の神の本地は、天竺の佛であり、本地の佛がこの地に跡を垂れて神と生れたのであると云つた。そしてこの神佛混淆の說に基づいてこゝに兩部神道說が生れた。これは佛者が眞言宗の金剛胎藏兩部を神道に附會したものである。從つて兩部神道の根柢には深くもかの自力聖道門の自力修業の思想があつた。だからその流を汲む修驗者（行者）等は、矢張山岳を以て彼等の最もよき修業道場とし、常人の堪え得ざる底の難行苦行をして、これを開いたのである。

その後鎌倉時代になつて、源空（法然上人）更に引き續いて善信（親鸞上人）の他力淨土門の宗派が興隆し來る迄に、多くの山岳が開かれ、その後と雖も山岳を開く者は、依然として自力聖道門の僧侶か、或は兩部神道の修驗者等であつた。

さてこれらの修業僧や行者に關する信濃山岳傳說の代表的なものとして、「槍の播隆上人」を擧げることが出來る。上人は越中の產で、或時一挺の鑿を携へて、海拔一萬百四尺の高峯槍ヶ嶽の絕巔を極め、そこに四坪程の廣場を作つて座禪修業したと云ふ。又戶隱山では役行者が九頭龍を洞窟に封じこんだとも云はれてゐる。

神佛混淆傳說

上述の如く山岳の開祖たる名僧高德は、夫々の山岳に於ける大小の寺院の開基として崇敬されてはゐるが、その上段たる頂上には、殆ど例外なしに、神の小祠が祀られてゐる。これは矢張山岳及びそこに生起する諸現象を、神の表徵として畏敬した古來の素朴なる山岳崇拜思想と、神國日本の人心に根深い特有の敬神崇祖の觀念とが合體して、常に神祇上位となつてゐたからであらう。而も猶一山に於ける神佛混淆に對して、少しも矛盾撞着を感じなかつたのは、卽ち前章縷述の本地垂跡說が、民間俗流の間にもかなり廣く行はれてゐたからである。これだけのことを頭において、仔細に山岳傳說を檢すれば、所謂神佛混淆傳說若しくはその痕跡と見らるべきものゝ少なくないのに一驚を喫するであらう。そしてその代表的なものに「八ヶ嶽の如來水裁判」がある。

太古八ヶ嶽は扶桑第一を誇る富士山より遙かに高かつた。ところが或時、淺間神社の富士の女神が、八ヶ嶽の權現神社の神に向ひ、八ヶ嶽よりも富士の方が高いと高言したので、八ヶ嶽の神は癇癪を起して、女神との間に大喧嘩が始まつた。そこで阿彌陀如來、所謂神に對稱佛に對稱本地法王とも稱へられる如來の計ひで、八ヶ嶽の峯から富士山の頂上へ長い樋を懸け渡して、水を注ぎ込むと、水は富士山の方へ流れたので、氣荒な女神は力を籠めて八ヶ嶽を足蹴にしたため、その頂は八つに裂けたと云はれてゐる。次に前述の駒ヶ嶽の神馬速駒に乘つた阿彌陀如來が、毎年十二月二の申の日に、善光寺の駒返橋まで出御されると、長野地

方の口碑は云ひ傳へてゐる。又長野市城山の縣社の前身年神堂八幡宮は本地彌陀如來で、十二月遷宮神事の夜、如來八幡宮となつて、年を取らせ給ふたのだと云はれてゐる。

傳說と云ふ譯ではないが、木曾の御嶽の兩部神道の細目に就いては、島崎藤村氏作「夜明け前」の中に書かれてゐる。本章に關係があるから附言する。

山岳出現傳說

牢乎として動がざる山岳の雄姿に接して、古代人はたゞ之を畏怖崇拜するばかりであつた。然し人智は常に進步する。かくて彼等の間にも、唯與へられたものを與へられたものとして、卒直に受け容れる受動的心理から、「何故?」の疑問を投げずにはゐられない能動的心理への飛躍的推移があつた。恰も今日我々が兒童の發育過程の心理に於て、常に親しく經驗しつゝあるやうに。

山岳はどうして出來たのであらうか。

これが古代人の山岳へ投げかけた第一問であつた。そしてこの疑問に對する彼等自身の解答は、卽ち彼等のその時代、換言すれば傳說發生の各時代に於ける、彼等の知識の進步的階梯を明かに物語るのではなからうか。

さてその前に立つてさへ威壓されるやうな山岳の出現に關しては、何等かの外力が作用したのであらうとは、古人も考へた。この超人間力が、果して如何なるもので、それが如何に働いたかの想像によつて、大略三類に區別されるやうに思ふ。

最も原始的想像に於ては、この超人間力を素朴なる山岳崇拜思想に結んで、絕大なる神力となし、原因を大地の外に置いた。謂はゞ我々が戲れに蟻の道に小石を置いたやうなものである。この部類に屬するものとして、戸隱傳說がある。卽ち神代の昔天照大神が外の騷ぎに、天岩戸を微かに開かれた時、手力雄命が餘りに烈しく引き開けたので、遠く下界にけし飛んだ岩戸が、こゝに戸隱山となつた。故に又石戸山或は戸神山とも

呼ばれてゐると云ふのである。次に同工異曲の傳說として、太古女神媧氏が天で五色の石を煉つた時、誤つてその一片を落した。石は地を穿つこと數十里、その窪地の安曇筑摩の地は大湖水となり、その石は卽ち日本アルプスとなつたと云ふ。これらは神の力の働いた。巨岩巨石が、卽ち山岳となつたと云ふのである。

これが一步進步すると山岳出現の原因を兎も角も大地に結んだ。けれどもその構成要素たる物質を得るに困じ、總てを神祕力に委ねて、遂に無から有を生ぜしめた。餘り適切な例ではないが「一夜山」の傳說がこれに近い。卽ち時の帝は上水內郡鬼無里村に遷都の御志により、旣に設計まで終へさせられたところ、この山中の鬼共が一夜の中に、戶隱山と戶倉山との間、恰度此の里の眞中どころに、別の山を築き上げて妨害したので、遂に遷都のことは中止になつた、と云ふのである。

抑〻地球の冷却による地殼の變動に、山岳出現の原因を求めることは、到底思ひも及ばなかつたであらうが、遂にどうやら地殼の變動に着眼するに至つた。が、外力を依然として神の掌中においたのが、最後の第三類に屬する傳說である。

太古一夜の中に、近江の琵琶湖と、信濃の諏訪湖とが陷沒して、夫々その土で成り上つたのが富士山と淺間山とであつた。これは伊勢の朝熊岳鎭座の大山祇神が、姉娘磐長姬を淺間に、妹娘木花開耶姬を富士に鎭座させるために造り上げたものだと云ふ。

これに似た傳說として有明山の背伸び傳說がある。卽ち北安曇郡平村字中綱の中綱湖の場所に中綱寺があつたが、穗高嶽の一部であつた小丘有明山が急に背が高くなると同時に、その地は陷落して一夜に湖水となつた。そして今も沈鐘が眩ゆい金光を放つてゐるのが、舟の中から見えると云はれてゐる。

これらは孰れも隆起の原因を兎に角陷沒に求めてゐるが、寧ろ口碑と云ふべく、事實の素朴なる觀察を基にしてゐるので、それだけ奔放自在な空想の產物たる傳說的興味は稀薄になつてゐる。

山名由來傳說

山岳の名稱の起源は實に種々樣々であるが、これを大別すると、次の三種になるが、一山で數種を兼ねる場合もある。

一、山容、地形、現象などによる地學的名稱

二、歷史、故事、稀には人事による歷史的名稱

三、口碑、傳說による傳說的名稱

但しこゝに地學的及び歷史的命名と雖も、傳說的要素を多分に含んでゐることは云ふまでもない。

先づ山容によつた名稱は、屋根形の四阿山、富士形の信濃富士（有明山）八ツ嶽、槍ヶ嶽等。

地形的命名法によつたものとしては、穗高、有明山などがある。太古安曇平に湖水漫々たりし頃、その附近の高地と云へば、今日の山岳の他にはなかつた。だからほはほつくら高い、たかみは高見の所の義で、穗高嶺の地名があつた。が後に湖水が涸れると、以前の湖畔地であつた河內島々等一帶の地も亦地形的に穗高嶺と呼ぶやうになり、更に後人々全く低地に降るに及んで、斜面的の高原の全部の名稱となつたが、新地名が各所に出來てからは範圍が狹くなり、現在では穗高鄕のみをほたかみ、山岳を穗高嶽と呼ぶやうになつたのださうである。これなど代表的命名で、地勢の變化による名稱範圍の廣狹など却々面白いと思ふ。次に有明山は地勢の關係上、太陽尙地平線下にある有明（卽ちあいあち、間明、夜明と明時との中間を意味する）の頃、安曇平の西に屹立する山頂に射し初むる曙光の壯觀による名稱ださうである。

山岳關係の諸現象に基く命名法の例としては、白馬及び駒ヶ嶽を擧げることが出來る。白馬は正しくはシロウマで、初夏の候山頂より北へかけて、恰も馬の形の如く、岩が黑く現はれるので、里人は之を農事曆として、田代搔きをした。依つて代馬卽ち白馬嶽となつたのださうだ。駒ヶ嶽は實に數種の命名法を兼ねてゐるので、內地形的の命名としては、山の東方に馬形の大岩あるを以て名づくと云ふのがあるが、地質現象とし

て、雪の消えやうとする頃、駒形一體全備して見えるによるとも云ひ、或は此の駒形の南方に種蒔爺とて、四月頃笠を被り柄杓をもつた形の遠望が恰も駒形であるからとも云ふ。此の形の出現を以て大豆蒔の時節としてゐるさうである。これらは地質現象を農事暦としてゐるものだが、も少し風變りのものに、上水内郡の飯縄山がある。

飯縄實は飯砂山で、峯から北へ十四五町下つた所の方十步許の濕地の土は、その味麥飯と異らず、又恰も粟飯の如く又大麥の割飯にも似てゐるなどゝ云はれ、里俗餓鬼の飯と呼んでゐる。依つて飯砂山の名が起つたのださうだ。因に「蕉氏筆乘」に「唐山に白石あり、煮て喰ふ」とあり、又チグリス、ユウフラティース河畔の土も食べられると云ふことだが、右はわが國唯一の可食土であらう。

第二類の史的命名法では、前掲の駒ヶ嶽について、「續日本紀」に、「天平十年八月信濃國神馬を獻ず。黑身白髮尾云々」とあつて、山麓に有名な牧がある。よつて名づくと云はれ、又「馬八尺以上龍と云ふ」とかで、同地に龍飼山、龍ヶ崎の名稱もある。次に諏訪郡藤澤片倉村の守屋嶽は、戰後諏訪明神の弓矢と鉾を夫々山頂に藏め給ひ、再び用ひざることを示し、且つは鎭守としたので、守矢鉾持の山名となつたのださうだ。猶この地方に守屋氏の多いのは、明神に從つて弓矢を司つた大臣の後胤であると云はれてゐる。又南アルプス鹽見岳は、山麓住民の鹽不足を救はうと、健御名方命が登山せられ、四方を見渡して、今も話に殘る鹽の泉を發見されたからの名稱であると云ひ傳へられてゐる。又小縣郡西鹽田村の獨鈷山頂には、弘法大師の形見の獨鈷が埋められてあると云ふ。

第三類の傳說的命名法によるものは、既に述べた天津速駒の駒ヶ嶽、富士の女神の激怒にあつた八ヶ嶽、それから人口に膾炙してゐる姨捨山などがあるが、尙一二の例を擧げれば、西筑摩郡駒ヶ根村字宮ノ腰にある燒棚山は、炮入りの團子と毒酒とを與へられた、惡いたづらの山姥が、火を失して燒け死に、今も熄まぬ

餘焰のための山燒の故の名稱であると云ふ。又太古一巨人が西條湖畔の小松を御嶽山頂に移植すべく手を伸べた時、夜が明けて、その場に投げ捨てられた松が根を張つた所が、北安曇郡の唐松嶽山頂だと云ふことである。又下高井郡沓野川上流の琵琶池の龍神は、その昔中野高梨家の息女黑姫をさらつて、ともに黑姫山の主になつたと云ひ傳へられてゐる。

巨人及び足跡傳說

山岳に關する怪奇傳說の中、殊に多いのは、巨人及びその足跡傳說である。希臘神話は恰も神々とこれに敵對する數多の巨人との爭鬪譚の觀があるが、日本のやうな島國に於ても、巨人傳說は決して少くない。これは一つには太古日本本土が亞細亞大陸に接續してゐた時代からの遺物の一種として、幾變遷し來つたものかとも考へられるけれども、矢張山岳の重力感威壓感に基く心理的所產である場合が多いだらうと思ふ。

唐松嶽の巨人に比すべき山男は、白馬嶽の蓮華溫泉附近の山の坊の萬である。これを退治しようと山中へ入つた獵師は、彼の爲に八裂きにされた。その子が殆ど偶然の機會に山男を擊殺した。雲を突く鬼の如きものであつたと云はれてゐる。又有明山下馬羅尾谷の信の宮と云ふのは、百姓久兵衞の倅信太郎を祀つた所で、彼は笹刈に行つた時突然背丈が伸びて雲表に聳ゆる許りの巨人となつて行方を晦ました。が後父親の農事に超人間的助力をしたので、常人にあらずとて神として祀られたと云ふ。

こゝで一寸面白いのは、希臘神話など大陸傳說に於ける巨人は元來神の敵役として現はれ、從つて人間的屬性なく、凡ての點に於て神に近い。然るに我島國傳說では、巨人も寧ろ人間性を賦與され、剩へ人間からの變化としての巨人さへも現はれてゐるのである。だから彼等の爲す所もさほど非人間的な突飛なことでなく、常人のなす所と事柄に於て大した相違はなく、例へば小松の移植を思ひ立つたり、杣夫や獵師を相手に、之を嘲笑戲弄したり、或は農事萬端に超人的助力

をしたり、總てこれらは質に於て人事に他ならぬ。かの大陸的巨人は常に神を向ふに廻して爭鬪を事としたので、人間などは全然彼等の眼中になかつた。が、島國的巨人は多く對人間的存在であつたと云へよう。

さて巨人に關しての第一聯想は、足跡傳說である。一體信濃國に湖沼の多いのは、皆唐松嶽傳說の巨人の足跡だと云はれてゐる。が、その他神、鬼、山女、人間などの足跡も少くない。

戸隱山中の鞍池は、昔手力雄命が天岩戸を引き開けやうとして、向股に大地を踏みなづんだ時出來たので、一名足跡池と呼ばれてゐる。又上諏訪町の手長神社の神領の數ヶ所の水溜は元諏訪明神の家來手長足長（右祭神）と呼ばれた大男の足跡の凹地であると云はれてゐる。

太古安曇野一帶が湖水であつた頃、鬼が跳び超えて歩いた跡の一つと云はれる鬼の足形が、今松川村字野の上にある巨巖に殘つてゐる。

上水内郡芋井村の、坂田金時の母を祀つたと云ふ蟲食明神は、里俗に阿姥明神と稱し、小蟲倉山上にある。昔この附近の今洞に住んでゐた山女の大きな足跡が、當時よく雪の中に印せられてゐたと云ひ傳へられてゐる。

有名な鬼女紅葉を退治した平維茂のその際の足跡と云ふのが、上水内郡柵村の下祖山の峯への半途の凹石に殘つてゐる。

最後に足跡でなく手形石と云ふものもある。健御名方命が服從の印として捺されたと云ふ、岩上の掌の形は、今も殘つてゐる。これによつて經津主命と武甕槌命に對する和解が成立したのださうである。

怪奇傳說

巨人以外の怪奇傳說として、鬼神、鬼女、大太法師、天狗、山姥、雪女郎、矮人などの傳說がある。

謠曲にもある戸隱山の鬼女紅葉は、圓融天皇の御宇平維茂に退治されたと云はれ、その正體は女體の鬼とも、女裝の山賊の頭目とも、邪心の女とも云ひ傳へら

れてゐる。又有明山の鬼族の首魁八面大王は、田村麿將軍の山鳥の征矢によつて退治られたと云ふ。これらは大江山の酒顚童子と同樣當時の山賊であつたことは容易に考へられる。彼等の所業は多く人間的で、これに怪奇的空想の尾鰭をつけ加へたものに過ぎない。白馬嶽の純白の大櫻草が紅紫色に咲くやうになつたのは、山の魔神大婆王に八ツ裂された、美女手卷の鮮血に染められてからだと云はれてゐる。

小縣郡虛空藏山の城砦の、武田信玄の家來多田三八に斬り落された大鷲の足のやうなものは、昔からこの山に棲むクハジヤと云ふ怪物のものだと云はれてゐる。これは鞍馬山の天狗の類で、寧ろ一種の怪鳥ではなかつたかと思はれる。

次は山姥で、前述の阿姥明神の祭神や前揭蟲倉山麓の三竈の洞穴に棲むと云はれる山姥や、これも前述の燒棚山の山姥や、それから下伊那郡上飯田村白山の窟へ時折憩みに來ると云はれる山姥などがある。この白山窟は洞口狹隘薄衣でなければ入れない位であるが、內部は廣く且つ奧深く、窓穴があつて明るい。この穴から覗いてみると、眼下に展開する風景宛ら別世界の如く、奇觀云ふばかりなく、里俗こゝを山姥の座敷と呼んでゐる。尙此の他南佐久郡金峯山中にも山男山姥が棲むと云はれてゐる。

一體穴居時代の洞窟は外敵防衞の目的から、なるべく隱蔽された所や嶮岨な山中などに造られた。從つてさうした遺跡たる岩窟は、長い間後人の手に荒らされることなく殆ど昔のまゝに保存されて、どこの山岳にも附き物のやうになつてゐる。そこで偶〻そこに棲む世捨人、殊に女性の物凄い風貌に怖れて、これに超人間力を賦與して出來上つたのが、所謂山姥傳說である。

その代表的なものとして、謠曲「山姥」がある。尤も場所は越後越中國境の境川の上呂山で、行き暮れて宿を借りた京都の女藝人が、宿の主の山姥と一緒に山姥山廻りの曲舞を舞ふと云ふ筋である。この曲は一休和尙の作とも云はれ、物凄い深山の景趣を巧みに寫してゐる。ところでその上呂山卽ち揚籠山は、信濃北安

曇郡大塚新田揚籠村にもあつて、而もその峯近く、廣さ數十歩ばかりの岩窟がある。內部に二三丈の平石があつて、これが山姥の產座と云ひ傳へられてゐる。こゝではどちらがどちらでもいゝのだが、共に「あげろ山」の山姥傳說であるのも面白い。

次に雪國特有の雪女郎傳說だが、信州邊では隣接越後にその本場があるので比較的少い。僅に山岳に傳へられてゐるが、北方山岳の中逸早く登山路の開かれた白馬嶽の雪女郎が、最も入口に膾炙してゐる。人間の妻となつて平和な生活をした後、正體を現して消え失せた、眞白な膚の雪の精の話である。

終りに小男として、身長三尺の道者戶隱山の秋葉三尺坊が、インキ壺位の器に酒三升を入れた話、木曾黑川にある、身長一尺二寸の義仲の琵子を祀つたと云ふ小子墳の話等がある。

龍蛇傳說

所謂山に千年海に千年の掟によつて、蛇は蛇となり、蛇は龍となり昇天する。かくて八ヶ嶽の大蛇も雲を捲いて海へ出たと云ふ。山岳傳說には蛇と龍が多く現はれる。たゞ蛇は陸に、龍は水にあるが、蛇から進んだ龍も矢張蛇體をもつものとされてゐる。支那では古來龍は鱗蟲の長たる、想像上の神靈なる動物で、鳳麟龜と共に四靈と稱へられてゐる。だから謠曲「春日龍神」に於ける如く、釋迦の佛跡を探りに支那から印度へ渡航しやうとする明惠上人を諫止すべく、春日明神が八大龍王の姿となつて奇瑞を現はしたと云ふやうな物語もある。

信濃山岳の中、戶隱山種ヶ池の龍神は、九頭を有し火を吐いて山を七卷半捲いた。九頭龍は役行者に岩窟へ封じこめられたと云はれてゐる。

下高井郡澁溫泉の橫湯山湯泉寺の代々の住職の入寂が近づくと、寺の前の大沼池を水源とする橫湯川に、池の龍神が、石塔を流して寄こすのが習はしになつてゐるさうだ。

山といふわけではないが、昔安曇・筑摩の地が大湖

水であつた時代に、湖の主であつた犀龍と穂高見命との間に出來た白龍太郎は、父の命の宿願成就の目的を以て、母の犀龍に乘つて、漫々たる湖水の水を北海へ導くために勇躍、嶮嶽峻嶺を打ち拓いて一路驀進し、遂に所期の一大目的を遂げたと云はれてゐる。白龍太郎又の名を泉小太郎と稱し、その岩水傳說は、かの駒ヶ嶽の天津速駒傳說と共に、その勇壯豪快一讀痛快なる趣向に於て、正に信濃傳說の双璧をなすものであらう。

これらの龍神は、眞に神として祭祀せらるべき、怪異なる神靈的存在であるが、又一度怒を發すれば、その復讐的禍災の及ぶところ、蓋し測り知るべからず、毒氣を吐き洪水を起し、人を湖底に拉し去り、或はその場に鏖殺す。慘忍凄絕直に惡魔鬼神のなすところと異ならず。

こゝに龍ではないが、有名な大蛇の傳說がある。死蛇の祟りだから少し趣が違ふ。長野市石堂町の西光寺に、所謂大入小入の墓と云ふ大蛇小蛇の慰靈塔がある。昔一人の杣人が朝日山に這入つた時、偶然にも大蛇の頭を斧で斬り落した。彼は卽夜祟りによつて悶死し、尙彼の家の前を通行の人々悉く惡氣に打たれて頓死した。よつてかの塔をたてゝ大法會を行ひ、漸く祟りを免れたと云ふ。同じく朝日山の小蛇は未だに生存してゐるので、戒名に朱を入れてあるさうだ。

下高井郡沓野川上流の琵琶池の龍神は、都から流れて來た盲目の琵琶法師の彈奏する琵琶の妙曲に聞き入つてゐた時、法師に氣付かれたので、自分の素性をあかし、豫ねて自分に無斷で池水を濫用する澁の湯の人々を懲らしめの爲に大洪水を起さうとする計畫を打ち明けた。法師は龍神の言に背いて事の急を人々に告げ、辛うじて彼等を救ふたが、自らは湖底深くさらはれて了つたと云ふ。

さて以上は比較的素朴なる龍蛇傳說であるが、龍蛇傳說の大部分は、女性に關連し、若しくは所謂蛇性の淫傳說と稱すべきものである。まづこれら龍蛇傳說に於ける、相互に變化自在の女性と龍蛇との關係を考察

する前に、二三の傳說例について見よう。

女が蛇になつた例では、餘りに有名な「道成寺」がある。「元亨釋書」によれば、安珍に對する火のやうな執念の淸姫は、大蛇の姿になつて男を追うた。又西筑摩郡三岳村の蛇ヶ淵の大蛇は、男に捨てられた赤髮の女の恐ろしい一念によつて、自ら化身したものであると云ふ。

次にこれらの反對に龍蛇が女の姿に變化する例としては、謠曲の方の矢張「道成寺」に見られる。卽ち紀州道成寺で釣鐘再建成り、その撞初の日、鐘に執心の大蛇が、白拍子姿でやつて來て、遂に鐘を落したが、經文の功力で蛇身を現し日高川へ退散するといふのである。次に信濃傳說では、戸隱山の九頭龍權現の化身たる姫御前に行き逢つた人があるとも云はれてゐる。

これらは唯二三例に過ぎないが、龍蛇と女性とが如何に相互に變化自在なものと考へられてゐたかは解るだらうと思ふ。そこに何か深い因緣がないだらうか。

佛敎では女人は內心如夜叉であると云ひ、傳說的に蛇は邪惡、淫慾、嫉妬、憎惡の權化であるかの如く考へられて來た。そこで兩者は心理的に相似てゐる。因緣が深い。とまづかう考へられたものらしい。

然しこれだけでは餘り漠然としてゐる。もう少し、つかりした根據がありさうに思はれる。

それは易學の陰陽道の原理である。「釋名」に、「陰は蔭なり、氣は內にあり、奧蔭なり。陽は揚なり、氣外に在り、發揚なり」と。これは易の理から出たもので、「太極分れて陰陽となり、二者相往來交感して、萬物化成消長す」と云はれてゐる。そこで天地萬物に於ける對立的なものを陰陽兩性に分けてみると、人間に於ける男性、獸類では山を駈け廻り强力獰猛な熊や羆の類は明かに陽性で、女性やかの柔弱穴中に隱伏する蛇虺の類は明かに陰性である。この意味で、「詩經」小雅の祈父之什、斯干篇に、「吉夢とは維何ぞ、維熊維羆、維虺維蛇、大人之を占ふに、維熊維羆は男子の祥にして、維虺(蝮)維蛇は女子の祥なり」と。大人は古代占夢の官人で、祥とは子を生んで福德の備はることであるか

ら、蛇の夢は女兒分娩の兆といふ譯である。かくの如く女性と龍蛇とは、陰陽道的に密接な關係に置かれてゐたのである。

このやうに兩者は共に陰性であり、萬物陰陽兩極は相索引すと云はれるのであるが、では、よく傳說に取扱はれる所謂「蛇性の淫」を、どう說明したらよいだらうか。まづこの部類の傳說の二三を擧げてみよう。

多くは人間に化身した龍蛇が女子を犯すのであるが、中には蛇體のまゝに扱はれたものもある。

穗高嶽山麓穗高町と南穗高村との境の田圃中に、「お玉柳」と云ふのがある。この土地一帶は曾て打ち續いた柳林で、土地の人々は柳を伐り根を掘り起して、開墾に從事した。ところがその仲間に入つてゐた美女お玉が、長さ一丈餘の大蛇に見込まれ、體をぐる〳〵卷きに卷かれて死んだ。今のお玉柳の樹蔭の出來事であつたと云ふ。「大沼池」は下高井郡沓野川の水源で、その主の龍神が洪水を起して地人を鏖殺しやうとした時、澁溫泉旅館つばたやの主人が三人の娘の一人を與へる約束で、やうやく災難を免れた。その後龍神の催促を受けて一策を案じ末娘の繪姿を畫いて池に投げた。ところが彼が歸宅してみると末娘は死んでゐたと云ふのである。

次は龍蛇が人間に化身して女子を犯す場合である。

北アルプス燒嶽山中の梓村の「ナメラ淵の大蛇」は、美しい村の娘お里を見込んで、彼女の戀人古着商物助の姿となつて、娘を籠絡したが、遂に發見されて逃げ去つた。然しお里はやがて一斗の蛇卵を產んだ。その後偶然なことから大蛇は殺されたと云はれてゐる。

下高井郡沓野川上流の「岩倉池の龍神」は、昔永正の初年、中野東山山麓の高梨城の姫君に懸想し、小姓姿になつて城中に入り込んだが、遂に惡計露顯の復讐として、水災を起さうとしたが、地嶽谷の山神に妨げられて、該地方四十八池の大部分の水を徒らに涸渴せしめただけで失敗に終つたので、今同地には二三の池しか殘つてゐないのだと云ふことである。一說にはこの高梨家の息女黑姫をさらつたのは、琵琶池の龍神であ

つたと云はれてゐる。

北アルプス山中より發して、糸魚川の邊を流れ、日本海に注いでゐる越後の姫川の由來話がある。その昔白馬嶽山中の池に棲む龍神が、糸魚川太守の息女白菊姫に思ひを懸けた。かくて美々しい行列を組んで姫を迎へに行つた龍神の使者が拒絶され、更に再度の懇請も斥けられて激怒し、遂に大洪水を起して、城を流し太守も姫も溺死して了つたと云ふことである。

さて所謂蛇性の淫傳說は、各地方に種々雜多な形式となつて殘つてゐるが、孰れも一讀眉を顰めざるを得ざる底の凄慘な物語ばかりである。恐らくこの部類に屬するものほど原始的本能充足の淫猥傳說はないであらう。然らばかゝる淫慾傳說發生の理由は何か。

これには大體二三の原因的事情を擧げることが出來ると思ふ。

抑〻古代人の最低度の知識生活に於ては、あらゆる天災地變苦難病死等々を、直ちに神の激怒による神罰と考へるより他に仕方がなかつた。そこで神々の御心を安んぜんがために、或は祭祈を行ひ、或は神前に贄を供へるやうになつた。恰も幼兒が持てる物を與へて可怖人の御機嫌取をするやうに、古代人も只管邪惡魔神の御機嫌取をしたのである。そこで神供に際しては、身を以て贄となる以上によく絶對服從の意志を明瞭に表示し得る方法はあり得ない。かうなれば萬事弱肉强食の古代社會のことだから、勢自己防衛力の最も薄弱な者に白羽の矢が立つのは當然のことであるが、子供では（稀にはその例もないではないが）以て一族の代表とするに足らず、又兎角剛情邪慳な老人では、神慮に添はないであらうし、かく種々銓衡の結果、最後の貧乏籤を引かされたのが、卽ち一族中最も懦弱從順、而も常に一族の花となつてゐた、從つて又邪惡鬼神にも氣に入るに相違ないと思はれた、處女であつたのである。加之傳說的興味から云つても、處女こそ最も效果的であつたのである。

然しこれだけの理由では、相手の邪神を龍蛇に限ることは出來ぬ。そして實際人身御供傳說の中には、龍

蛇以外の魔性のものがいくらもあるのである。その一例として信濃傳說「早太郎の話」を擧げよう。

赤穗名所は美女が森よ、殊に名高い光前寺

民謠にもある駒ヶ嶽山麓の寶積山光前寺の境內に猿神退治の義犬塚と云ふものがある。

昔駒ヶ嶽の山犬が寺の緣下で仔を產んだ時、親切な和尙の許へ殘していつた一匹が、卽ち早太郎であつた。當時遠江府中、今の貝附澤の天滿天神社の廟に巢喰ふ怪物に、農作保護の目的を以て、年々の祭日に、神籤に當つた處女（一說に童子）を人身御供として與へる例になつてゐた。或時の祭祀の夜社僧が窃に樣子を見てゐると、やがて現れた一怪物が、「今夜信濃の早太郎は來ないか」と訊くと、他怪物が「來ない」と答へて、生贄を奪ひ去つた。そこで社僧は艱難辛苦の末、遂に光前寺の犬早太郎を探しあてゝ國元へ連れて行き、首尾よく退治した怪物の正體は、大きな老猴であつたと云ふ。その時の奮鬪で斃れた義犬を祀つたのがかの一基の古塚である。

この話に於けるが如く、人身御供を與へる魔性は、必ずしも龍蛇とは限らぬ。が、然し各地傳說の人身御供と云へば、その八九分通まで大蛇龍神を對象とする。

こゝに考へられるのは、民間習俗に關する文獻、或は現在各地の口碑などに徵して、由來蛇は性淫慾な魔性の動物である。概して構造粗雜な明けつぴろげの田舍家では、蛇の繁殖の多い草叢竹籔山林などに圍繞されてゐるので、蛇の家屋侵入の機會が多く、彼等は屢〻土藏の主となり、或は天井の梁を這ひ廻り、或は座敷に橫たはる。そして時に家の祕藏娘を犯して自らも共に死んで了ふと云ふやうな、不氣味極る話もある。だから昔から蛇は淫慾旺盛な魔性の動物と一般に信じられてゐた。そして今日も信じられてゐる。そこで弱肉强食的意味から云つて最好適であり、又傳說的興味から云つても最效果的である、人生の花たる美しい處女を、人身御供とする場合、對稱の魔性として龍蛇を選ぶことが、性慾的に最適切なる配合であるばかりでなく、萬人嫌惡の對象たる、形體的に最も醜惡な、性

質の最も殘忍な、蛇虺の類を選ぶことによつて、對象的に一層處女の美とか弱さとの印象を深め、傳說的興味百パーセントを狙つたものと思はれるのである。

因みにわが國に於ける龍蛇傳說の最古のものは、云ふ迄もなく「八俣大蛇」のそれで、出雲國肥の河上流の鳥髮の上方に住んでゐた、足名椎手名椎は、大蛇のために毎年一人づつ七人の娘を失ひ、最後の櫛名田媛が辛うじて素盞嗚命によつて救はれたのである。

神代に於て既に蛇淫傳說の濫觴を見るのも面白い。

美人國信濃

埴科郡松代町に御安町と云ふのがある。源頼朝が善光寺參詣の砌、折柄參り合せた領主の娘御安姫の美しさに心惹かれ、卽日鎌倉へ連れ歸つて嬖妾とした。後頼朝の薨去により彼女が、政子の前の嫉妬を逃れ得て、庭の實らぬ紅梅を持ち歸つて植ゑた屋敷跡が、卽ちこの町であると、「御安紅梅」の口碑に云ひ傳へられてゐる。

天下の征夷大將軍頼朝公の寵愛を一身にあつめた美女御安姫は、實に信州松代の產であつた。これは唯一例に過ぎないが、信濃傳說を讀んでまづ氣のつくことは、美人の多いことである。殊に數多い龍蛇傳說、就中蛇淫傳說の大半に登場する女性は、悉く輝ける美の所有者ばかりである。

これは勿論前述の如く、傳說的效果を狙ふ作爲に依るのでもあらうが、又一面信濃の國は、古來所謂美人國であつたのではなからうか。これについて一寸興味ある口碑がある。

南佐久郡十日町の中ほどに、古い石燈籠が一基ある。笠石の裏の銘によれば、これは永享二年好色師奥州住秀鶴と云ふ者によつて建立されたものだ。彼は奥州邊には目につくやうな美しい女もゐないので、女色を探ねて京へ上る途中、こゝまで來て思ひもかけぬ美女に會ひ、その悲慘な身の上話を聞いて悟入し、受難の女を救ひ出して、記念に建てたのが、所謂「好色燈臺」である。一說には近代的に一對二基であつたとも云は

れてゐる。

抑〻東北地方は日本の田舍と云はれ、東京上野驛着の東北本線鐵道貨物品種調査の統計によると、その大部分は非加工的天然生産物、卽ち果實野菜雜穀の農藝産物或は魚介類等であるが、東海道線による東京驛着の貨物の大部分は、文化的加工品ださうである。今日尙かゝる狀態であるとすれば、その昔京師に遠く文化の遲れてゐた同地方に、所謂好色師の求めるやうな洗練された美人の少なかつたのも當然である。然るに信濃路に入ると、彼を發心させるほどの不幸な美女に行き會つた。と云ふ意味は、卽ち京師を中心に東方信濃から奧州へと、次第に數少くなつてゆく美人分布の暗示ではないだらうか。尤もこの女は土地の者ではなかつたが、かゝる美女の存在は、やがて美の播種を意味すると思はれる。

ところでもう一つ氣づくことは、この美女の多い信濃の傳說の中に、謂はゞ醜女傳說とも稱すべきものゝあることである。一二の例をあげると、前述龍蛇傳說中の西筑摩の赤髮の女が、男の情婦に欺かれて大蛇と化つた話や、「野婦ヶ池」の傳說などがある。昔駒ヶ嶽山麓の大原村の豪農の娘が、家風に合はぬとの理由で、離緣されたので、悲歎の餘り家出して、今の野婦ヶ池畔に辿り着いて、ふと見ると恐ろしい惡鬼の相が水鏡に映つてゐる。女は初めて離緣の理由を知つて、池に身を投げて了つた。その時殘した柳の杖が芽を吹いて、今大木となつてゐるさうである。

さてかうした所謂醜女傳說の存在は何を意味するであらうか。思ふにこれは同地方の美人型女性群の中に偶〻交る醜女型女性の介在が、人々の好奇的對象となつたからで、これらの傳說に於ては、常に美醜の對立によつて、所期の效果をあげようとしてゐるのを、その特徵とする。例へばかの赤髮の女には黑髮の女が對立し、又縮顏や水鏡の鬼面相には、覺醒時の美貌が對立する。要之醜女傳說は一面美人國信濃の反證ではないだらうか。

さて信濃には何故美しい女が多かつたのだらう。

それには種々な原因があるであらう。が、大體これを歷史的原因、習俗的原因、及び地理的原因の三つに大別して考へて見ようと思ふ。

歷史的原因——

一、信濃の國は昔王城の地近畿からほど遠く、文字通りの山國で、僻陬不便の地であつたから、上古以來國定中流の配所であつた。現に御所、御所平、上の御所、向御所、內裏窪、姬宮塚などは、皆配流の人々に關した地名であらうと云はれてゐる。この山國が比較的早く開けてゐた理由ではないかと思ふ。江戶時代になつても、かの大奧の老女繪島が役者生島と情を通じ、この地に配流されて、寂しい晩年を終つた。

二、國法によらず、寧ろ自發的に都に居たゝまらなくなつた、上流階級の一般落伍者乃至罪人の移住し來る者が多かつた。例へば「タラの木樣」の傳說によると、平安朝末期の頃、下賤な男と戀に落ちた上萬が駈落ちして、信濃鐵道の池田檜川驛附近、有明山麓に辿りついて、女兒を分娩した。が、烈しい氣苦勞のため兩の乳房が萎びて乳が出ないので赤兒は間もなく死んだ。遺骸埋葬の地に墓標代りに挿しておいたタラの木の芽が根づいて、今四抱への老大木となつてゐると云ふ。

三、由來信濃の國は、軍略的に要害堅固、難攻不落の要所が多く、戰國の諸將擧つてこゝに築城し、正に群雄割據の觀があつたので、今日尙百有餘?の古城址を數へ得ると云はれてゐる。

四、從つてこの地は、神代に於ける健御名方命と經津主命、武甕槌命との小競合以來、大小幾多の合戰があつて、戰國時代上杉武田兩氏の川中島の合戰となつた。然し何分にも悠長な時代のことだから、戰の合間合間に脫營遊樂の武士などもあつたらしく、口碑傳說に殘つてゐる。

五、敗殘の武人のこの地に遁竄するものも少なくなかつた。例へば源義賢がその甥義平と私鬪して殺された時、三歲の駒王（義仲）は乳母の夫に抱かれて、信濃に隱れ、權守中原兼遠に托せられたと云ふ。又入山

邊溫泉に殘る武士の娘と炭燒男との戀の悲話なども、この邊の消息を物語るものではなからうか。

六、多くは敗戰の武家一門を祖先とする遁世者群が、山間僻地に特殊な集團生活を營んでゐた。例へば平家の餘黨の籠つたと云はれる、下高井郡秋山の如きがこれである。

さてこの地にあつた、以上縷述の公卿武將武士及び一門眷族、卽ち當時の特權階級の落胤の後裔と稱すべき女性が少なくなかつたであらうと思はれる。

習俗的原因——

一、昔南佐久郡十日町邊では、領主から貢米を責められて納められない百姓の妻或は、娘は貢米質として領主の犯すところとなつたと、「四鄰譚藪」に見えてゐる。かの「好色燈臺」の美女は、或配流の貴人の姫君で、誘拐された上、更に又貢米質になるところであつたと云ふ。

二、亂世時代に西國から女を連れて來て、妻を重ねる借女と云ふ風習があつた。

三、領主が一定の期間京に上つて禁裏の守護に任ずるに就いて、これに扈從して、或期間の雜用を奉仕するために、里人の間から人選されて雇傭に就く。これをナガブと云ひ、有名な「物草太郎」はこれに雇はれて京に上り、出世の緒の美女との緣を結んだのである。

四、今日地方青年が憧れの心に驅られて上京するやうに、昔は立身出世の地として京を夢みた。かの「淨念寺十三塚」の須坂の飴賣青年は、青雲の志やる方なく上京、公家の息女と戀に落ちたと云ふが如きこれである。

五、京と東武及び東北との間、又後世鎌倉及び江戸と北陸との間の、重要なる交通路たる信濃路を、通行の公卿武家等と宿場女郎との間のこぼれ胤もあつた。

以上縷述の諸々の機緣によつて、當時の特權階級の落胤がこの地に散布されたであらうと思はれる。

地理的原因——

一、徒らに脂粉臙脂の技巧にのみ走らず、高雅なる精神美の享有による、天然美の容色を目標とするのが、

現代美容法の極致である。崇嚴雄大なる山岳圍繞の信濃の女性は、朝夕美しく崇高なる山岳から受ける心的影響に於て斷然惠まれてゐる。

二、水清ければ美女多しと。信濃の地は至る所淨水に惠まれ、殊に昔の木曾の女は美しかつたさうである。これらの地理的原因による、自然的美容法に於ては、永遠の恩惠に浴し得る幸福なる彼女等なのである。

尙この他にも食物關係の原因などもあらうかと思はれるが、未だこれを審にしない。

さてその昔數々の傳說發生時代に於ては、信濃への移入系統が、前略の如く略限定されてゐたから、他からの混入も少なく、彼等の後裔も亦比較的純粹に、從つて美女系統も長く汚されずそのまゝに保存されてゐたのであらう。然るに今や鐵道網の完成による四通八達の時代に於ては、單に信濃ばかりでなく、凡そ內地のいづれの地方でも、特に交通遮斷されてゐるやうな特殊事情のない限り、どこでも各府縣からの移入が自由で、纔に舊慣墨守の特殊地方を除いては、土着民との間の自由雜婚によつて雜種混入、昔日の純粹性は殆どなくなつてゐるであらう。のみならず一方嚴重なる風紀の取締りと婦人の貞操觀念の發達に伴ひ、勿論例外はあるとしても、往時の如く風紀紊亂貴顯人士との自由なる交りなどはまづない。だから今日の信州の女性が、必ずしも傳說の女のやうな美の所有者であるとは云はれないだらうと思ふ。

以上美人國信濃の考察は、少々餘談に亘つた感があるが、由來信濃山岳傳說に最も深い關係のある美女麗人について一應の考察をすることは、必ずしも無意義なことではなく、否寧ろ山岳傳說の理解のために、是非必要なことであるばかりでなく、又一寸興味ある題目でもあるので、特にこゝに一章をもうけて詳述したのである。

閑話休題、山岳傳說の本道に戻つて、以下考察を續けようと思ふ。

湖水傳說

ある夏の夕、赤城山大沼湖畔に忘れられたやうな汚い小舟が一つあつた。私等兄弟は、漕げもしない櫂を操つて湖心に出た。が、何かひいやりと身に迫る鬼氣を感じて、漕ぎ戻らうとしたが、舟は徒らに薄暮の湖心に輪を描くのみで、少しも進まうとはしない。焦れば焦るほど舟は恰も湖の主の手中に弄されてゞもゐるやうに、黄昏るゝ湖面によしなき波紋を擴げつゝ、たゞ無氣味な堂々廻りをするばかりであつた。——

さて話を元へ戻して、先に縷述の多くの龍蛇傳説に於て、屢ゝ引合に出るのは山の湖水である。

一、一體山の湖水の多くは舊火山の舊火口に、長い年月の間に、雨水や清水などを湛へたもので、その形狀恰も摺鉢狀をなし、湖岸よりほんの少し離れると、急傾斜となり、湖心に於ける水深は、殆ど正確には測り知ることが出來ぬ。從つて水色蒼黑く動かざること死の如く、かの明朗な平地の湖水から受ける感じとの相違は、主としてこの形狀的相違によるのであらう。

二、山の湖水は、それを水源とする谿流による他、河海の如く絶えず水の新陳代謝作用の行はれると云ふ譯にはゆかないので、宛ら深淵の趣を一層助長する。

三、人跡稀なる環境から受ける感銘から云つても、寂寥々たるものである。

四、水中探査によれば、藻類の繁殖生育力は驚くばかりで、そこに棲息する生類も、山椒魚の如き不氣味なものが多い。

これらの理由又は聯想から、その蒼く淀んだ水面を凝視すれば、宛ら魔性の棲家の如く、これに舟を浮べれば、今にも湖底に引き込まれはしまいかと思はれるやうな、物凄い感じがする。そして實際溺れたら殆ど助からず、湖底の形狀と藻類の繁茂と、加ふるに鹹水の放浮力の小なるため、屍體さへも浮ばないことが多いので、恰も湖の主に引き込まれたやうに思はれる。かうした陰慘なる現實感に基づいて生み出されたのが、山の湖水傳説なのである。從つてそれはいづれも怪奇悽絶なもので、これらを信濃傳説について大別すれば、龍蛇傳説、投身傳説、沈鐘傳説、及び底拔傳説

の四種類に分類出來ると思ふ。この內既述の龍蛇傳說で、同時に投身傳說であるものもあるがこゝにはその他のものについてのみ述べようと思ふ。

投身傳說はまづ自殺と、正確には投身とは云へないが他殺とに分けられる。且つ廣義に動物の溺死などもこの內に含まれる。

上水內郡若槻村の北端にある髻山に、昔漫々たる水を湛へてゐたと云はれる姫池と、南西の中腹にある姫石とにまつはる傳說がある。時は天正三年八月、父の仇敵乘月保三を討たうとして、脆くも返り討にあつた長沼三萬石の番士赤沼賀十郎の戀人八重姫は、悲歎の餘り池に身を投げた。その怨念の籠つた姫の姿の石が乘月をおびきよせて、返り血によつて悶絕せしめたと云はれてゐる。

次は南安曇郡の燒嶽山麓に、或若い夫婦が棲んでゐた。然るに女が双生兒の死兒を分娩して肥立がわるく、衰弱するにつれて、男の愛は情婦の方へ移り、遂に非道にも病婦を燒嶽噴火口に投げ込んで了つた。が、その後女の怨念の籠つた噴煙は、男と情婦とを燒き殺した。それから後に火口が變つて、今では水を湛へてゐる舊火口は、「涙池」と呼ばれてゐる。

次に戶隱山中の「鞍池」。ある年の七夕に百姓が池畔を通ると、突然自分の曳馬が狂躍して、池中に沒し去つた。以來每年七夕の日に、池の中に燦然たる黃金の鞍が見えると云はれてゐる。

北安曇郡には、木崎中綱靑木の三つの山中湖がある。この靑木湖岸の牝牛が、對岸へ貰はれて行つた仔牛の愛に惹かされて牛舍を遁れ、仔牛を探ね、遂に湖水へ落ちて沈んだ。以來彼は靑木湖の主となつて、今でも悲しい聲が湖底から響いて來る事があると云ふ。

さて沈鐘傳說について、すぐ聯想されるのは、かの山の湖水の沈鐘にまつはるミステイシズムを、幽玄深刻に描出した、ハウプトマンの戲曲「沈鐘」である。この名作を頭において讀む時、なべての沈鐘傳說などは、實に單純なものである。

前述の中綱湖のある場所に、昔七堂伽藍を擁する巨

刹中綱寺があつた。ところが或時有明山が急に高くなり、反對にこの土地は陷沒して湖水となつた。今でも舟を浮べると、沈んだ釣鐘が金色の光を放つてゐると云ふ。

又昔盜賊が、神川村の舊國分寺の鐘を盜み出して、小縣郡小牧山頂の須川の池の畔まで來ると、鐘は「國分寺戀しや」と云ひながら、自ら動いて池の中へ落ち込んだ。かくて爾來鐘は池の主となつたと云ふ。

さて山の湖水傳說の第四類底拔傳說は、遠隔の兩地の井戸や池や湖水が地底を通ずる拔穴によつて相連絡し、種々の宗敎的奇蹟の現れることを作つたものである。有名な奈良二月堂のお水取傳說に於ける如く、平地にもこの種傳說は少くない。湖水傳說中殊に宗敎的色彩濃厚なるを以て特色とする。

これも平地ではあるが、長野善光寺山內の阿闍梨池は、每年如來印文の行事の濟んだ三日目から一七日の間、不思議にも滿水になる。これはかの「扶桑略記」の著者皇圓阿闍梨が、遠州櫻ヶ池より龍身を以て參詣する證據であると云ひ傳へられてゐる。

南安曇郡有明村中房山山腹の傘岩大明神の鼠穴は、昔里人の註文によつて膳椀を穴から出して貸してくれたと言はれ、この穴は有明山頂の金明水、銀明水、を湧き出させてゐる岩穴まで拔けてゐるとも云はれてゐる。又上諏訪七不思議の一たる葛井の淸池は、之に器の供物を沈めると、卽刻に遠江國鎌田の池に浮び出ると云ふことである。

これらはいづれも地下水相流通することになつてゐるが、この他に所謂風穴傳說があつて、諸國の風穴の中には矢張底拔傳說に屬すべきものが少なくないことを附言しておく。

雨乞傳說

平地にもあるが、山地に於て殊に多い。雨乞傳說はその方法によつて、三種に大別される。

一、詩歌的感應によるもの

二、奇蹟的靈驗によるもの

三、意識的無意識的を問はず、科學的效果によるもの。

これらの中詩歌的感應によるものは、多く都會地の有閑階級の間に喧傳せられ、彼等特權階級の品位を維持し識見を誇るための所謂裝飾藝術の一たる詩歌の功利的價値を强調し、以て俚耳に入り易からしめたのである。かの小野小町の和歌、寶井其角の俳句などの雨乞傳說は、既に人口に膾炙してゐる。が、山岳傳說外のものだから、こゝには總て割愛する。

奇蹟的靈驗によるものは、最も原始的空想的、從つて最も傳說的興味の豐富なものが多く、喜雨を祈念する對象も種々雜多である。

上伊那郡の仙境山にある、青年道士の草庵跡の井水は、旱魃の時、地人がこれに雨を乞ふと、不思議に靈驗があると云はれてゐる。

明曆正保年中、埴科郡東條村の仁右衞門といふ男は、旱魃の時、小さい竹筒を以て、四阿山（菅平）の池の水を汲んで來る。と、一天俄にかき曇つて、豪雨車軸を流す如く到る。その間竹筒を笠原山の木の枝にかけておき、頃合を見て再び水を四阿山の元の池に返すと、忽ち晴天になると云はれてゐる。

前述中綱寺陷沒の時、大鐘は沈んだが、半鐘だけは殘つた。旱天に、岸の半鐘と湖中の鐘とを綱で繫いで、水中で兩者を會はせると、必ず豪雨滂沱として降り注ぎ、半鐘を離すと雨が歇むと云ふことである。

さてこれらの傳說は、殆ど何等の根據もなく、全然作り話の類に屬する。が、さうした非現實的構想にこそ、却つて山岳傳說的興味が多分にあるのである。

第三種科學的效果によるものは、意識的無意識的な祈雨の實證的效果に、傳說的光芒を賦與して、出來上つたもので、その根本原理は等しく、比較的高處に於て多人數集合して喧騷、以て雨雲を呼ぶにある。例として、

上水內郡信濃尻村の「地震の瀧」の前で、たゞ矢鱈に騷ぎ立てると、瀧の主の氣に觸つて、忽ち瀧波荒く大霧起り風を誘ひ雲を呼び、大雨沛然として到ると云

ふ。

北佐久郡立科山（古名高井山）山中より千曲川橋の材木を伐り出す時に、大勢大木の綱に取りつき、聲を揃へて叫べば、一天俄にかき曇り、豪雨盆を覆し、聲靜まれば晴天となると云ふ。これに就いて、「信濃國怪異奇談」の著者が、「この山のことは、余これに登りて、右材木を曳かせて、よく〳〵見聞せり。」と裏書してゐるのも道理である。

山鳴傳說

山鳴傳說は又笛伏傳說とも稱せられ、山に起る或種の音又は聲を、その發聲原因の不明なために、俚俗の例によつて、傳說的取扱をしたものである。これらの聲音は單に一回的のものではなく、天候の變化時季節の推移期或は年中、間歇的に發聲するもので、恐らく山岳の地質或は山林溪谷等に於ける、氣象學的又は地質學的現象に起因するのであらう。從つてこれら聲音によつて、吉凶を豫斷すると云ふのも或程度まで頷かれるのである。

埴科郡清野村山上の砦跡は、天文時代倉科左衛門の居城であつた。昔から屢〻この邊に遠雷の如き響をたて〻山鳴りのすることがある。が、この音は遠く聞え近く聞えずと。これは勿論地勢と氣流の關係によるのであらう。これを里人は、倉科左衛門が山上に埋めた螺貝が、時々鳴り出すのだらうと云つてゐる。

南佐久郡川上村の金峯山麓に、何物とも知れず好んで人を呼びかけるものがある。大概一聲であるが、時に二聲になると、凶兆として、村人はその地を去ると云はれてゐる。

惟ふに秋季深山幽谷の寂靜境に於て、得體の知れぬ聲音を耳にすることがないでもない。たゞその依つて起る原因が不明であるので、これを神秘的な怪異現象と考へるやうになつたのである。

終りに類似傳說として、原因明瞭の聲音傳說をあげよう。卽ち上水內郡小蟲倉山の太鼓石の上下二洞の下の洞へ這入り、結縷草の根を切り敷いて打てば、恰も太

皷の如き音を發し、一說にかの天豪の石皷に異ならずと云はれ、俗稱どんどろ岩とも呼ばれてゐると云ふ。

これらの山鳴傳說は、深山幽谷特有のもので、誠に山岳傳說の名にふさはしいものである。

結　び

山岳傳說の中で見逃し得ない昇天、降臨傳說については、別に拙文「神話時代の山岳」に於て、詳しく考察しておいたので、こゝには重複を避けて、一々の考究はしないが、たゞ信濃山岳傳說にも、勿論この種傳說の幾つかを數へ得ると云ふことだけを附言して、その一二の例を擧げておく。

昇天傳說の一種としては、先に述べた、巨人傳說中の「信の宮」傳說などがある。これは常人の背丈が急に伸びて巨人となり、大地を離れて昇天したと云ふのである。次に降臨傳說としては、昔安曇筑摩の地が、まだ大きな湖水であつた時代に、安曇の連(むらじ)の祖先である穗高見命が、日本本土の背深と云はれる信濃の國に天降つて、長くその湖畔に住まはれたと云ひ傳へられてゐる。殊に筑北の野に聳える冠着山の傳說は、最も典型的なものである。——

手力男命が天の岩戸の扉を擔いで、天空をひた走りに駈けつてゐた。今や再び天照大神の御威光は天地の隅まで行き亘つてゐる。大空から見下ろすと、下界も歡喜に滿ちてゐた。そしてそこに靑々とした若草に全身を包まれた美しい山が立つてゐる。走りつかれた命の足は、吸ひつけられるやうに、その山頂まで下つて一休みした。そこで又今度のやうな騷ぎ、岩戸隱れなどの起らぬやうに、何とかして扉を隱して了ひたいと思つて、裝束の亂れをひき繕ひ、冠を正して八方を眺め廻した。かくて扉の隱された所が戶隱山であり、冠を着られた山が冠着山と呼ばれるやうになつたと云ふ。

以上大略ではあるが、信濃山岳傳說について、一通りの考察を終へた。中には山地山麓或は低地關係のものもあつて、眞に山岳傳說の名に値しないものもあるが、由來信濃の地は全體として一大高地をなし、所の

平地も既に相當の高度を有し、加之四周に山岳を繞らし、山國情調の豊かな所が多いのであるから、これらをも含めてこゝに私見を加へた次第である。

他日よき機會に惠まれることもあらば、更に全國各地方の山岳傳説をも考究し、これを本考察と比較檢討したいと思ふのである。(大尾)

——昭和九年四月十三日了——

本稿目次及び採用口碑と傳説一覽表

はしがき。信濃の山岳概觀、信濃山岳傳説の包括性

神馬傳説。信濃十大傳説—物草太郎、善光寺緣起、刈萱石童丸、姨捨山、戸隱山、鬼女紅葉、諏訪神、寢覺床、有明山安曇平、駒ヶ嶽神馬、「駒ヶ嶽速駒傳説」の特殊性とその梗概、神馬傳説の意義、「蟲倉山の駒の馬屋」、「駒返橋」

開山傳説。山岳神秘境、佛敎傳來と自力思想の流入、僧侶の開山、本地垂跡説、兩部神道と修驗者、「槍の播隆上人」、「役行者と九頭龍」

神佛混淆傳説。山上の小祠、山岳に於ける神佛混淆、「八ヶ嶽如來水裁判」、「駒返橋」、「年神堂八幡宮」、木曾御嶽

山岳出現傳説。出現の疑義、出現傳説の意義、その三類、神力によるもの、「戸隱傳説」、「日本アルプス」、地上神秘力によるもの、「一夜山」、地殼變動によるもの、「富士と淺間」、「有明山」

山名由來傳説。三大別

一、地學的名稱、(イ)山容によるもの、「四阿山」「信濃富士」「八ツ嶽」「槍ヶ嶽」、(ロ)地形によるもの、「穗高」「有明山」「駒ヶ岳」、(ハ)現象によるもの、「白馬岳」「駒ヶ岳」「飯繩山」

二、歷史的名稱、「駒ヶ岳」、「守屋嶽」、「鹽見岳」、「獨鈷山」

三、傳説的名稱、「駒ヶ嶽」、「八ヶ嶽」、「姨捨山」、「燒棚山」、「唐松嶽」、「黑姬山」

巨人傳説。意義、「唐松岳」、「白馬岳蓮華溫泉の萬の話」、「信の宮」、大陸の巨人と日本の巨人

足跡傳説。「唐松岳の巨人」、「戸隱山鞍池」、「手長神社神領の水溜」、「松川村鬼の足型」、「阿姥明神山女の足跡」、「平維茂の足跡」、「諏訪明神手形石」

怪奇傳説。「鬼女紅葉」、「有明山八面大王」、「大江山」、「白馬岳大櫻草」、「鬼神鬼女傳説の意義」、「虛空藏山のクハジヤ」、「鞍馬山」、山姥—「阿姥明神」、「三瀧の洞穴」、「燒棚山」、「白山の窟」、「金峯山」、洞窟、山姥傳説の意義、謠曲

「山姥」、「信濃揚籠山の山姥の產座」、雪女郎「白馬岳」、小男—「戸隱山の秋葉三尺坊」、「小子墳」

龍蛇傳說。蛇—大蛇—龍。「八ヶ岳の大蛇」、四靈、謠曲「春日龍神」、「戸隱山種ヶ池の龍神」、「九頭龍」、「大沼池の龍神」、「白龍太郎の話」、豪快傳說の双璧—神靈的存在とその龍神、復讐鬼とその龍蛇—「大入小入の墓」、「琵琶池の龍神」、女性關係の龍蛇傳說—「元亨釋書の道成寺」、「蛇ヶ淵の大蛇」、(女が蛇になりしもの)、謠曲「道成寺」、「戸隱山の九頭龍權現」(蛇より女への變化)、女性と龍蛇との關係—心理的相似性、易の陰陽道的解釋、蛇性の淫傳說—「お玉柳」、「大沼池の龍神」、(以上、蛇體のまゝ)。「ナメラ淵の大蛇」、「岩倉池の龍神」、「琵琶池の龍神」、「姬川の話」(以上、男に化身)。蛇淫傳說發生の理由—一、弱肉强食の犧牲、二、傳說的効果、「早太郎の話」、三、性慾的覺性としての蛇、四、美醜の對稱、「大俣大蛇」

美人國信濃。「御安紅梅」、「好色燈臺」、日本の田舍東北、美人分布、醜女傳說の意義、「蛇ヶ淵」、「野婦ヶ池」、一、歷史的原因—(イ)配流の地「繪島生島」、(ロ)自發的移住者、「タラの木樣」、(ハ)城砦多し、(ニ)合戰多し、「健御名方命」、「川中島」、(ホ)敗殘の武士、「幼少の義仲」、「入山邊溫泉の話」、(ヘ)敗殘新著群の集團生活、「秋山のこと」、二、習俗的原因—(イ)貢米質、「好色燈臺」、(ロ)借女、(ハ)ナガブ、「物草太郎の話」、(ニ)京への憧憬、「淨念寺十三探」、(ホ)重要路線信濃路、三、地理的原因—(イ)崇嚴なる環境、(ロ)水清し。四、食餌的原因。今日の信州女性

湖水傳說。赤城大沼。山湖の特徵、(イ)擂鉢狀、(ロ)水の代謝作用少し、(ハ)靜寂の環境、(ニ)藻の繁殖、(ホ)生類湖水傳說發生の理由、四種類、一、龍蛇傳說(既述)、二、投身傳說—「髻山の姬石」、「燒岳の淚池」、「戸隱山の鞍池」、「靑木湖の主」、三、沈鐘傳說—ハウプトマンの「沈鐘」、「中綱湖」、「須川の池」、四、底拔傳說—「二月堂お水取」、「阿闍梨池」、「傘岩大明神の鼠穴」、「葛井の淸池」、風穴

雨乞傳說。一、詩歌的感應によるもの—「小野小町」「其角の俳句みめぐりの句」二、奇蹟的靈驗によるもの—「靑牛道士」、「仁右衞門と四阿山」、「中綱湖の鐘」三、科學的效果によるもの—理由「地震の瀧」、「立科山」

山鳴傳說。意義、「淸野村山上の山鳴」、「金峯山龍の呼聲」「小蟲倉山の太皷石」

結び。昇天傳說—「信の宮」、降臨傳說—「穗高見命」、「冠着山」、「戸隱山」

北アルプスの紅葉風景

（笠谷・笠ヶ岳・下佐谷及び其他の諸谷）

中野山堂

筆者中野山堂、名は善太郎氏、大正三年八月、私が始めて飛騨雙六谷を、見座より水源地の双六谷まで、溯行したときに、氏は雙六小學校長として、一行に加はられた、爾來氏は雙六谷を中心として、支谷を縱横跋渉せられた、本稿の如きも、その中の一部記錄として、見られる、今から三年前の執筆であり、或は聊か末梢的に、詳密に過ぎた嫌ひもないではないが、世に殆んど知られてゐない谷々の記述である點に於て、又、安政年間、本郷本覺寺の椿宗和尙が、下佐谷から笠ヶ岳への登山道を開拓した話や、播隆上人安置の佛像の在銘や、施主の名を詳記せられたる點に於て、おそらく未發の記錄と珍重してもいゝかと思ふ、播隆を「岩行者」と銘してあるのも面白い言葉だ、又銘の中に見える「加多賀嶽」とあるは、肩ヶ岳で、則ち笠ヶ岳の別名であることを、贅註して置く。

（烏水生）

年々に見る山裾の紅葉も、めづらしくないので、一度高山の紅葉を探つて見たいとの望が、茲二三年、來絶えなかつたが、どうにも其の機會を得なかつた、昭和六年十月八日、別に山から迎へに來たと云ふわけでもないが、探勝慾の切なるまゝに笠ヶ岳へと出かけた、笠谷から登つて下佐谷に下る豫定で、官行事業の事務所に二晩程厄介になれば、木の蔭や岩の中に寢ないでもよいのみならず、兩方とも、トロッコの軌道がついて居るから、麓迄行くのに、非常に便利である、昨日から準備はして居たものゝ、昨夜の大雨で、今日の出發は一時見合せることにしてゆつくり寢込んでしまつた、起き上つて見ると、空がからりと晴れて、日がカン〳〵射して居る、まことに近頃稀な天氣模樣を見せて居るので、どうでも出發することに決した、別に用意をすると、途中蒸し暑い、と云ふて、夏の服裝では頂上は寒からう、色々考へた揚句は、中に厚いメリヤ

スを着て、上に夏服を纏うた、リュックサックの中へは二食分の辨當に、地圖と雜記帳一冊放り込んで、漂然として家を出た、友人一人あるでなし、極めて氣樂なものだ。

本鄕の家を出たのが、午前七時であつた、秋とは名のみ、まだ〳〵殘暑の氣候だ、高原川に沿うて東に向つて行くと、眞正面に朝日を浴びるので、中々に暑い、長倉と云ふ所まで來て、自動車を待つたが、容易に來ない、無用の時には、よく邪魔されるが、入用の時は中々間に合はない、何も足を儉約するつもりではないが、どれだけでも、早く山中に分け入つて、少しでも、餘計に山の時間を送り度いと思つたから、約一時間も待つて見たが、終に姿を見せなかつた。

いたし方ないので、徒歩にきめて、そして殆ど笠谷の入口迄二時間程を費して、たどり着いた時分、牛の吼える樣な音を立てゝ、二臺やつて來た。

十時笠谷入口の官行貯木場を訪ねて、色々と山の樣子を聞いたり、新らしく出來た貯木場の設備など見せて頂いて、其處から山の上の方へ二百四十間あると云ふ殆ど三十度內外の角度をしたインクラインの緣につけてある電光形の、極めて勾配の急な跡をたどつて、約一時間で其のインクラインの頂上迄達した、其の時は恰度三人の人夫たちが、晝食を終つて茶をすゝり乍ら、休んで居たので、自分も山の勝手を聞き度いと思つて、一休した、併し私の期待する山の話は一向に知識が無くて、しきりに近頃不景氣のはなしをしかけられた、飛驒の山又山の此の笠谷の岩の頭で、生活の話などは、聞き度くもないが、さりとて此の山に何百人の勞働者が居やうと、それは風流のためでもなければ、探勝慾を滿足せしめるためでもないのだから、自然生活に卽した話に實が入るのも道理である、近頃餘程の閑人か變人でゞもなければ、こんな處に入り込む筈もないのだから。

此處で煙草をふかし乍ら、高原川の對岸の赤谷辻から、赤桶谷の八合目邊迄大ぶん紅くなつて居るのを見る、時間は十一時少し廻つた、序だからと思つて晝食

をした、たつた今、機關車が出發したばかり、乘つて行ける處を惜しい事したと云うてくれた、次に出るのが午後の三時ださうだ、しばらく憩ふと元氣が出て來て、誠に快適の心地になつたので、軌道を上流に向つて歩くことにした、脚下に此の溪谷入口の猿飛岩の頭が、木の間をすかして見える、岩に跳る瀧つ瀨が、騷々しい音を立てゝ來る猿飛岩と云ふのは、笠谷の溪谷が、高原川に落ち込む五六町上流の兩側を扼して、岩壁五六十間直立して居て、其の間が僅か二三間にせばまつて居るので、秋過ぎなどになると、子供を連れた猿が、自由に飛び交ふと云ふので、名づけられた岩だ、つまり此の谷の相門の態をして居るのだ、樹枝の間に、明滅する奔湍が、白い泡を飛ばして、落ちころげては行く、今自分の歩きはじめた軌道は、奥の事務所迄、九キロ餘の間五百メートル乃至二百メートルの下に、木の葉隱れの谷を見下し乍ら、極めて緩やかな勾配にのめされて行くのだ。

最初に出會ふ谷を、中ノ松尾と云ふ、大きな七八町もある樣なカーブを描いて、山の表に出る、見下しても、見上げても、岩壁の連鎖で、其の間を割り取つて、幅約三メートル位の道の兩側には、未だに生新らしい岩石の切開面が、トゲ〳〵しい、山の缺所には、安山岩の高い石垣がきづかれて居る、山道には勿體ない程の工事を施してある、野菊の後れ咲きが、道傍に搖れて居て、時々吹いて來る風はつめたい、やはり秋だと云ふ心地がする、少しばかり歩くと、石のトンネルがあつて、其處を拔け出ると、しばらく行くと、笠ノ主峯がヒョッコリ顏を出した、山の懷は大ぶん大きくなつて來た、幾つかの尾根と迫(サマ)が、この笠谷の本流に向つて、落ち込んで來るのを見ることが出來る、次に曲り込む谷を脇(ワキ)谷と云ふ、相當水量の多い谷で、長さ五六間の板橋が架せられて居る、傍に泉が筧から落ちて居るので、むさぼり飲んで、道シバの上にあぐらをかいて休んだ、強く紅い木の葉が見えるので、先程から何の木かといぶかつて居たら、それはフシの木の葉であることがわかつた、すぐ私の被つて居る帽子の上に、

其の葉が垂れ下つて居たので。

見渡す前方に、大きくうねつた尾根を見上げると、七合目邊迄、もう秋色が降りて來て居る、天氣がよいので、よく見える、只管今日の快晴を喜んだ、奥に進むにつれて、岩山は土山になつて來る、土トンネルの長さ二十間もあるのを、くぐりぬけて行くと、路の上にも下にも、燒畑は珍らしい、それは最も耕作の原始の姿である、春先に伐り朴した木に、火をつけて燒くのである、其の跡に種を下して、少しばかり除草を行ふばかりだ相だ、今重々しく穗を垂れて居るのは、稗、粟、蕎麥など、其の收穫に來て居る人には、此處から一里ばかりある、笹島（サヽジマ）と云ふ處の人等らしい、吞氣相な生活だ、山の歌を歌ひ乍ら、大きな奄（フヨ）に、色々な秋の實を取り入れて居る。

此の邊から笠谷の流域は、漸く擴がつて見える、もう誰にも遠慮なく、其の大きな胸元を打ち擴げて、如何にも、大自然の襟度を示して居るかのやう。

向ふ側の小山を越えて、笹島に行く山道がある、燒畑へ通ふ道だ、今ちぎり取つた穗を叺に詰めて、脊負ひ越すことは、中々難事だらうと思はれる、軌道の勾配は、緩かに上り、溪の勾配は急に上るから、段々と谷と道との距りが少なくなつて來たが、それでもまだ三百米以上は離れて居るらしく思はれる、フシの外に、紅いのが漆の葉だ、何れも藤の葉の樣な格好をして居て、秋に魁する木だ、櫻も追々赤くなるし、バチリンと云ふ灌木も速い、朴（ホウ）々谷の少し手前で、頭上の斷崖を傳つて、水簾がかゝつて居る、その路傍に落込むあたりは、とばしりが一杯かゝつて居て、仰いで居るうちに、着物をしつとりとさせる、次に朴々谷の大迂回にかゝるのだ、今通過する邊は、極めてゆるやかな彎曲を示して居て、所々に安山岩の顚落するのを見る、入口から此の邊迄の切開面は、多く花崗岩と、石英斑岩の新らしい面を見せて居たが、此處らには安山岩が出て來た、尤も途中水成岩の層も見えたが、これから奥の路傍の劈開面は、硅草の化石や、原生動物の化石が、一連に表はれて居るのを見た、たつた昨年工事を施し

たばかりだから、すべて岩石の面が風化を受けて居ないから、岩石や地質の研究者には、甚だ好都合である、それも一里以上に亘つて居るのだ、道傍には道路表が建てゝあるから、都合がよい。

入口から約二里ばかりで、其の次に通過するのが、ヒヤケ谷と云ふのだ、ヒヤケ谷が本流に落込む處には、悲祁ヶ瀧と云ふのがかゝつて居て、全部合流して居る、自分が今通る邊では、三筋に分れて居る、仰いで見ると、如何にも奥深い幽邃其の物の如き樹林の奥から、白蛇の躍るが如く、瀧が落ち込んで來る、高さは樹の蔭にかくれて居て分らない、一番奥のものが一番に水量が多いが、瀧の勢は左程でない、橋の下をせゝらぎの音を立てゝ流れて出るのもよい、この三瀧は、約一町程の間にあつて、末はまとまつてしまふのだが、兎に角奇觀だ、其の最奥の瀧を廻つて出て、私は路傍の木に腰かけ乍ら、來し方行く先を見はらした、如何にも大きなものの懐に抱かれて居ることに氣づいた、そして靜かな山の氣を腹一杯吸つた様な心地になつた、私が附近の風物に見とれて居ると、山の様に材木を積んだトロッコを、八臺引ぱつた小型の機關車は、遠雷の様な唸りを、山峽にひゞかせて出て行つて、各々トロッコには一人づゝの人夫が乘つて居る、先程のインクラインの頭迄を、一日に二回往復するのだ相だ、昔は此の邊から木材を搬出するのには、樽なら鐵砲出しと云ふて、谷一杯に樽を溜めて置いて、其の奥に拵えた貯水池の堰を伐り落して、流し、長材はシラ出しと言ふて、谷の中に材木を敷きつめて、其の上を走らせたものだが、大變に木質が損傷して、運賃の嵩むばかりではなく、非常に賣買價値を減じたものだが、トロッコによつて運搬さへすれば、それ等の缺點を除去することが出來て、好都合だ。

私は大正になつて間もなく、三年と云ふ年に、第一回の此の谷を探險した。それは此の谷の入口から流れに沿ふて、兩岸の岩壁を縫ひ、急流を渉り、非常な冒險で、大走の裾にかゝつて居る玉ノ瀧迄來て、閉ぢ込められた岩壁に遮ぎられて歸つた、第二回は昭和二年

に、同樣のコースで、累岩の間を傳ひ、岩壁の上下を喘き乍ら、此のヒヤケ谷の下迄來て、それに懸つて居る瀧が純藍の瀧壺に落ち込んで、小波をたゞよはせて居る樣子に見とれたり、花崗岩の塊の中に團まつて居る石灰岩の球顆狀沈澱物を採集したり、歸りに岩魚を追ひ廻したりしたことがある、併しそれは何れも溪谷の探險であつて、未だ曾て山腹に迄衝き入つた事はなかつた、勿論今日頃、こんなに悠然たる心構えで、此の山懷を彷徨することなどは、當時に於ては想像もなし得なかつた所である、矢張り谷添ひの探險には、深刻味が多く、山腹の徐行には、暢達さが伴ふ、途中線路工夫が居る外、誰にも遇はない、鳥獸すら鳴かぬ、俄かに脚下に慟哭の響がするを覺えた、樹蔭に大瀧がかゝつて居るらしいが、瀧の事は餘りに數多くあるので、あまり好奇心をそゝらぬことになつてしまつて、直ぐ對岸の中腹以上、檜の密林から突兀たる岩柱が、筍の如くに衝き出て居るのに、心を奪はれる、其の針葉林の間から、濶葉樹の淡黃色が、むつくりと持上つて見える、そして所々恐ろしくも、垂直の岩壁が續いて居て、一連の屏風を廻した如くに、谷奥に續いて行く、其の大走り國有林がつきて、栗屋谷國有林に接する處に、私の今夜の宿、官行事務所が建つて居るのだ。

道ばたには、山から伐り落した材木が轉がつて居て節面白い音頭に、人夫が拍手を揃へて引き出して居る。下を覗くと、底知れぬ深い谷底から、つめたい風を吹き上げて來る樣な架橋も二三あつた。

四時半に、事務所に到着して、來意を告げると、宿泊の快諾を得た、穿つて居た靴を脱ぎすてゝ、下駄穿で附近を歩き廻つた、もうすつかり兩岸から山脚は近く迫つて居る。側を水量豐富な溪が流れて居る。直ぐ前に笠谷の本流と栗屋谷とが、奔馬の頭をならべた如くに落ち込んで來るし、少し離れて蜂の尻谷、大走り谷が差し込むのだが、栗屋谷は、此處から六五町奥に入ると二つに分れて、鍋谷と云ふのを受けいれる、兎に角此の附近には、多くの溪は寄り集つて來る、その溪流の巢の如き所に、樅や檜の大木が地を蔽うて居る。

此處で上流を仰ぐと、笠の本流方面四五町の奥に、直立百五十間もある一大岩柱が立つて居て、其の肩の邊から水簾が落ちて居る、岩柱は八分目通り以下を深く刳り取つた樣になつて居て、奇觀を呈して居る、嵐氣が身に沁みる、やはり日本アルプスならでは見られぬ雰圍氣だと思うた、こんな環境の中に、瀟洒な白木造りの事務所に、今夜は泊るのだ、栂の大木を透して、西の空は純金色に輝き乍ら、夕靄はあたりをとざして來る、もう夜色は迫つた。明日の晴天を祈つて已まない。夜は大きな焚火をして貰つた、平和な氣分をたゞよはする山小屋の夜は更けて、寢に着いた、毛布一枚位にくるまつて、岩蔭に轉がるのにくらべると、何と云ふうれしいことだらう、併も疊の上で。

谷の音が耳について、中々寢つかれない。

明くれば

十月九日だ。

六時から仕事にかゝると云ふ係員たちと共に起きて、朝食をした、寒さは殊の外身に沁みる、それから宿料は、と聞いたら、實費として二十五錢いたゞくが、その外は、一厘なりとも受け取れない、といふ挨拶であつた。

辨當は二人前詰めて頂くことを賴んだ、こんな朝、なくてはならぬ駒鳥の聲は、なぜかきこえない、道案内を叮嚀に敎へて貰つて、六時半と云ふのに、笠ヶ岳に向つた、最初敎はつた通りに左側に落ち込む谷の、栗屋谷に入り込んで、柚の通ふ急な路を歩いた、左側に入る道を避けて、常に右へ右へと注意して、約十町程登つた處に、見上げると目眩のする樣な岩壁の直ぐ下に出た、柚小屋が二戸あつて、吊莚をはね除けて中を覗いたが、皆出て行つて、たつた一人の老炊夫が番をして居るのみだ、私が會つて下佐谷への下山途を聞かうと思つた中島某と云ふ男も、居なかつたので、聞くことは出來なかつた、其處でリュックサックを下して一休した、この老炊夫は、笹島生れの七十位な爺だが、この山の勝手には委しい、安政年間に本郷本覺寺の椿宗和尙がつけたと云ふ登山道も、よく知つて居る

し、其の道標の石佛も、此の附近に一體あるさうだ、大體に於ては、今自分が辿つて居る道と、合ひつ離れつゝ頂上に行くらし、若い時分から獵師をした話も聽いた、今年は熊はまだ一匹も出て來ないが、猿は時々遊びに來ると云ふて居た、一晩も泊つて、ゆつくり落ち着いた話をきゝ度いと思つたが、一時間ばかり休んで出發した、其の老人の言ふのに、頂上迄三里もあると云ふた事に不服を感じた、何となれば、事務所から二里と云はれる道を十町餘りも登つて、まだ三里もあると云ふのだから、耄碌隱居の言ふこと位にしてしまつて置いたが、扨て後になつて、實際登つて見て、成る程三里は充分あると思つた、そして經驗者の言ふことに、今更ながら權威を感じた、後で感じた事だが、兎角登山道の案内者は、道程を近く言ふ弊があると思つた、それも新登山口などが出來ると、競ふて宣傳するので、登山者が錯誤に陷ることがあると思つた、但し今の場合を指すのではない、登山道はやはり里數で云ふより時間で案内する方がよいかも知れない。

此處からの登り道が中々勾配が急だ、危險は更に無いが、非常に急な山の尾根を眞直に登るのだから苦しい、左に笠谷の本流の上流、右に栗屋谷の支流たる鍋谷、その兩流域を振り分けて居る此の尾根を、飽く迄進まねばならぬ、餘り急だから滑り落ちないやうに、道の兩側に杭を打ち込んで、それに横木を渡して、階段が拵えてある、極度迄膝を屈せねば其の一段づゝが登れない十段程登つては佇んだ、餘り階段の數が多いから數へる氣になつて、そして百七十三と數へて、どしんと腰を下した、鍋谷落口の瀧は樹枝にかくれて見えない、段々呼吸が平常に歸ると、あたりを見廻した、たゞ森閑としたものである、栗屋谷の右を扼する尾根は、大ぶん下迄、卵色の紅葉が下りて來て居る、伐採したばかりの木材が笠谷本流方面に轉がつて居る、右側の鍋谷方面は來年度伐採するのださうだ、標高は相當に高い筈だのに、樹の葉がくれになつて遠見は更に利かぬ、其の急坂を約十町も登ると、少し勾配も緩かになつて、大ぶん見晴しの出來る場所に出た、此處から頂

上迄は、二里半位なものであらうが、擇伐（タクバツ）は此の邊迄行はれて居て、大きな丸太が各所に轉がつて居る、營林署の係員に聞くと、今後の伐材方法は擇伐と云ふて、比較的古い樹木から、約半分を伐り、殘木を三十年後に伐ると云ふ豫定だ相だ、實際には半分を伐るのだが遠見では伐つたかどうか一向に分らぬ、これは風致の保存から云ふも、甚だ喜ばしい事で、心嬉しく感ぜられた。故意か偶然か知らぬが、兎角兩立し難い風致と經濟の關係は、此處では、都合よく調和して居るのを見る。若し此の方法によつて、日本アルプスの原始林が、皆伐を免るゝことが出來たら、其の恩惠に浴するもの、豈一人山岳順禮者のみならんやだ。

身體中の水分を絞り出して了ふかと思ふ程の汗を流して、駱駝の背の樣な丘陵幾つかを上下した、進むに連れて、眼界も擴げられる、そしてフト本谷の奥に眼を注いだ時、私は思はず顏をそむけた、それは笠の麓一帶の岩壁が、紅葉に彩られて居る處へ、朝日が直射して、强い反射が、うす暗い森林に彷徨した瞳孔を刺戟したゝめだつた、タケカンバや、白樺の類は、卵色をして居るし、幾度かの降霜に出會つた高山植物も、草本類は黃褐色を呈して居る、その中に燃え立つやうに、紅く名も知らぬ灌木類が交つて居て、中でもタケサンショや、岩ツヽジの紅葉は、殆ど紅の極致を見せたかと思ふ程の美しさだ。それが靑黑く地を蔽ふた、這松の間を點綴して居るのが、最早形容を超越して居る、空には一點の雲も無い、飽く迄輝かしい日光が强く岩壁を照射して居る、其の山腹の岩壁に刻まれた幾筋かの細溪が、手に取る樣に見えて、たつた今、岳の腹から湧いて出たと云はんばかりの細流を放射して居て、全く別天地の趣が深い。

日蔭になつた紅葉にも、特殊の趣はある、和やかな親し味を與へてうれしい、此の尾根を通つて居て、私は生來見た事の無い姫子の大木を見た、それは周圍凡そ二抱えもあるだらうと思はれるものだつた、姫子の分布は、多く此の地方のみで、他では多く見たことが無い、樹齡は最も短い部類に屬して居て、成長は旺盛

な木らしい、大抵の姫子は、切株を見ると、中が空になつて居て、立木は八分目以上枯れかけて居る、檜や花柏は、盛に成長して居る、檜の大木も見受ける。根が地上から高く上つて居て、其の下がトンネルになつて居る所があるので、二三箇所くゞつた、其檜の幾抱えもあらうと云ふ大木を、タテバツリと云ふて斧で割り取つた跡がある、それが十年や二十年前のことではないのだ、何のためにしたことか、一寸想像がつかない、或は獵師が小屋の屋根を葺くためでゞもあつたゞらうかなどゝ想像をして見たりした、喬木帶を拔け出て灌木林に入る、遙かに西方を見ると、白山の八合目以上が、桔梗色に雲表に浮んで居る、乘鞍岳と御嶽が重なり合つて、山裾を長く長く延いて居る、其の乘鞍の懷深く山波に抱かれて、平湯の邑落が、黃色の作物にかくまれて靜かに眠つて居る。

一重ケ招奥の上棚(イワンシナ)も、一段と高く見下される、四顧の展覽、漸く開けて、道は灌木帶の紅葉に緣どられて、峯に延びて行く、途中巨岩の下廻りを二度ばかりして、僅ばかりの泥流の裾を過る時に、清水が湧き出て居て、乾き切つた咽喉に濕を與へた、其の後、頂上迄約一里半ばかり登つて、歸りに下佐谷に降る迄、水分を取ることが出來なかつたのには閉口した、此の尾根を登りつめて、蒲田からの登山道と會する、其の道は尾根に沿うて、大部分笠谷側を這松を開いたり、足掛を作つたりしてある。

見下すと、外はよく晴れて居るが、笠谷と下佐谷の奥に、一團の雲が起つた、それが迫つて來ては大騷動と思つて、早く頂上にと志したが、思ふ樣に脚が動かない、それに空腹を感じて來た、北側からは兎角風が吹きつけるから、南側に面してガンコウランの座布團で、晝食をした、春の樣に暖かつた、早く行かうじやないかと云ふてせき立てられる義理もなく、一人旅の安氣さに思ふ存分、道草食つて居たものだから、時間が大分かゝつた、時計は十時過ぎを指して居る、偖て絕頂は直ぐ眼前に聳えて居るが、仰角が中々强いから、事によつたら半里位あるだらうと思つた、けれどもそ

れは後になつて、考へて見たら約一里位あつた。

此の邊にも、原生動物の化石を含んだ岩石の破片は散ばつて居る、小さく見えた起突が、存外大きいのに驚かされ乍ら、幾つかを乘り越えて、笠の絶巓に着いたのは、零時半だつた、案じた程氣候は寒むくなかつた、此の分では七八月頃もあんまりかはらない、トウ〳〵襯衣一枚で登りつめた、少し休んで居ると、漸く寒さを覺えるので、上衣をつけた、西方は一帶に雲の海に化したが、先程湧いて出た笠谷と下佐谷の雲は、座り込んで居て動かない、大きな乳紫色の雲海が、持上つて白山の天邊を間一髪の間に隱してしまつた、其の他はよく晴れて居て、展望は御定り通りだが、よくも空氣が澄んで居るので、景物はハツキリして、非常に近く見える、側に建てゝある標識の札に當る風が、シュシュウッと唸りを立てゝ行くのは、まことに氣味が惡い、今自分の前に立て廻された大自然の屏風、それは硫黄岳から、穗高連峯を經て、槍に續く一連の秋景だ、中にも穗高の胸元から山腹にかけて、細かく刻んだその

襞の一つ一つが、ハツキリと浮き立つて見える、眼界をずつと回らして、槍の左の方に大天井から、ぐるりと廻つて双六、蓮華、黑岳、藥師、その先の方に立山が、如何にも日本アルプス北方の重鎭らしい落ちつきを見せて、其の天際に何とも云へない人なつかしい色を漂よはせて居る。

それから脚下の双六谷はと見ると、水源地の連嶺一齊に紅葉して、下流へと押し進みつゝ「北の俣岳」から、ぐるりと取り卷いた豐かな彎曲が、世にも美はしく和かい黄紅の色にぬり潰されて、澄み切つた青藍色の空を限つて居る、コグラ谷の紅葉は、今自分の立つて居る其の脚下からはじまる。白い河原から湧き出た泉が原流となつて、迚も大きな紅葉の林の中に落ち込んで行くのが手に取るように見える、もう眼に入るもの、すべては紅葉の世界だ、下佐谷から笠谷の奥も、時々霧の霽間に覗くことが出來る、何れは黄色の世界、紅葉の世界と化して終ふ運命のもとに、其の峯々からは一齊に紅葉が下りかけて居る、眼を轉じて遙か西南を

見放つと、自分の在所の本郷地方や、袖川村や、籠枉の村落が立ちこむる霧の間から、黄色の田圃でそれと知られる、そして餘程落着いて見ると、高山地方のトタン板の屋根が、白く光つて居る、それはもう遠い夢の國でも眺めるが如くに、紫色の靄の中に淡く沈んで居るのみだ、硫黄岳と割谷山との、大鞍部を見越して、霞澤山脈が、梓川の沿岸に續いて行くあたりの紅葉は、うすれて見えるが、硫黄岳から槍につゞく間の谷々、迫々(ゼコ〳〵)の雄大さには、心を奪はれる、一番下流の足洗谷から、外ヶ谷邊は、今一息と云ふ處だが、鍋平から小鍋谷を經て、白出谷から瀧谷と、次に槍に迫るあたりは、血汐と眞黄とでベッタリ塗られて眞黑な這松の間に、ゆら〳〵と燃え立つ樣な其の色彩の對象に、神の技巧の極致を見せて居るのではあるまいか、驚嘆せずには居られない秋色ではある。

私は今たつた一人、此の突點に立つて、眼に入るに任せて環境の紅葉に魅入つて居る心、陶然として何だか物寂しい樣な感激にひたされて居る、扨も劫初の昔から、久遠の未來に向つて、凡そ風雨雪霜の自然の脅威も知らぬげに、夏に花咲き、秋に紅葉し、冬に白妙の衣を纏ふ雄偉なる岩塊を見下したそこに、一沫の寂寥を見出すのである、そうだ、秋だと云ふ感じは、深い何處からともなく、やんはりと引きしめる力を感ずる、木札に當る風の音が、シュシュウッと唸るのに心附いた、決して油斷はならぬぞと、警告を發するが如くに、序だから祠堂の扉を開いて中を拜することにした、暫く異端者と呼ぶのを許して頂き度い、私は曩に此の村の本覺寺と云ふ寺にある文獻から、播隆上人の事蹟を見つけ出して、此の岳に關しては、文政年間諸國を勸化して、祠堂を建てたり、佛像を安置せられたことを知つて居る、何時か實地に調べ度いとの宿望もあつたので、時間の後れるのも構ひなしに、叮嚀に中の尊體を包んだ眞綿を解いた、佛像は三座あつて、阿彌陀如來の長さ一尺三寸位の青銅製立像一座、同阿彌陀如來で三寸五分程の座像青銅製臺附一座、それに今一座は大日如來不動尊十一面觀音の三體が連座されて居るも

のであつた、其處で、最長身の阿彌陀如來には、無銘だから、寄進者も年代も不明だが、三寸五分程の座像の方には左の如き銘があつた、「飛州高原郷加多賀嶽成絕頂本尊等奉尊—三字不明—上品阿彌陀如來一體、念佛上人第五奉造立播隆佛岩行者眞佛尊—一字不明—也文政七甲申七月吉日

城州伏見下油ヵ町　施主　吹田屋彌三郎

母　つる

妻　てる」

今一座は三尊一體になつたものであるが、大日如來と十一面觀音は取り去られて、たゞ不動尊のみ殘つて居るが、それも風化作用で、原形が無い、中央で折れて居る、木製の臺の底に加多賀嶽大權現の本地大日不動十一面臺座地と記してあつた。

彼是一時半になる、私は今一度立山方面を見渡した、中に溶け込み度い樣な桔梗色の魅惑を、如何ともなし得ない、脚袴を卷き直し乍ら、ずつと手前の黑部原流から、雲の平のなだらかな紅葉に魂を奪はれ相だ、時間は迫つて來る、落着ては居られない、多くの感慨を頂上に殘して下山にかゝつた、笠谷や蒲田に通ずる道と分れて、笠谷とコグラ谷との分水界をなす尾根を、一里もあるだらうと思はれる程一氣に下つた、高さに於ても一千米以上は慥かに下つた氣がする、其處の鞍部で、二度目の辨當を食つた、ふり返ると笠の八合以下は、コグラ谷に向つて、黑い泥流、白い泥流を押し出して居る、扨て今通過した地層に就て見ると、其の黑く見ゆる泥流には、石英斑岩の絕頂と同樣なもので、白く見ゆるそれは、極小さい豆大の原生動物の化石を含んだ水成岩である、これは珠羅層のものではないかと思つたが、斷定は出來ない、其の鞍部から一大隆起を登らねばならない垂直五百米以上ある頂上は、二千五百米餘のタケゾリ辻と云ふのだ、已むを得ない雷鳥のねぐらを驚かし乍ら喘えいだ。

此の大突起あるがために、下佐谷から笠への登山は、非常に骨が折れる、中腹を迂回すると、距離が延びるから、已むを得ず乘越すのだ、結局笠への登山は、下佐

谷からすることは、笠谷や蒲田からするよりも、勞が多いと云ふことになるのだ、タケゾリ辻は、コグラ谷と、下佐谷と、笠谷との三方境界を控えて居るのだが、自分は右の尾根に向つて、コグラと下佐谷との境界線を只管辿つた、そして此の尾根を通る林道に出るつもりで、四邊を顧る暇もなく、脚絆の紐の解けたのを卷き直す事が、中々出來ない程急いだ、水が飲み度くて致し方がない、時計を見たらとまつてしまつて、さつぱり動かない、時々灌木帶の密叢に足を踏み込む、伐り開けも何もないので、見計ひが中々立ち難いが、双六谷方面へ下りては、大騒動と注意して、物の一里も下つたと思ふ時分に、笹の一ぱいに生じた尾根が廣くなつて、原生林で暗かつた、身長けに餘る笹原を思ひきり下つた、そして附近を見廻したら、其處は尾根ではなくて、下佐谷方面の山腹だつた、霧に立てこめられて見通しの利かぬと云ふ不利もあつたが、今更尾根に引かへすことは出來ない、時間は大ぶん遲くなつた樣な氣がする、儘よとばかりに其處を降れるだけ降つて居たら、小さな水たまりがあつた、何は措いても水は飲まねばならぬ、思ひきりむさぼり飲んだ味を忘れることが出來ない。

約十町も下つたらしく思はれる時分、大きな瀧の頭に出た、今更致し方がない、此の邊は何處を下つても岩壁に出會ふか、瀧にかゝるが普通だから、別に驚きもせなかつたが、山の上ではまだ日は高かつたのに、段々下るにつれて薄暗くなつてきたので、心細くなつた、其の瀧の緣に生じた熊笹や、灌木の根にすがり乍ら後向きに下るのだが、一寸踏み外したら、千仞の谷底が口を開けて待つて居る、こんな時の履物は、矢張り草鞋がよい、靴では踵の筋肉が言ふことを聞かないし、堅い岩に飛び乘ると滑る、私は今日一日の行程で、靴と草鞋とでは、一時間位、靴ばきのために餘計に時間を費しただらうと思つた、下るに隨つて、谷のひびきも耳に入り、河原が白く見え出した、都合によつたら、小屋でもあるかも知れないと、喜び勇んで河原に辿り着いたが、小屋も道もない、水量は大ぶん豐富だが、

河原の荒れた相を見ると、未だ原流らしい、何處の谷の奥に下つたか、さつぱり見斗がつかない、險阻な谷ではないが、さりとて樂な河原ではない、またしても大きな瀧に出會ふ、今度の旅行は、徹頭徹尾瀧に因緣が深い、河原を七八町下つて見たが、石饅頭がある所を見ると、人跡の至らぬ谷でもあるまいが、これと云ふ細徑もないたつた、一筋左側の山腹に行く道らしいのが、谷に來て居た、實はその道を少しばかり登つて見たのであるが、上りになつたので、直に引き返した樣な始末、再び谷添ひの累岩の間を躍り下つた、暮色はすつかりあたりを罩めた、谷添ひに百五十間も續いて高さ五六十間の岩壁の基部が削られて居て、どうだ、疲れてからこんな谷間を喘えぐより一泊せないかと呼びかけられる樣な心地がした。

そうだ、野營だと決した、食量はまだ一食分はある、寒いと云うても、雨さへ降らなければ、凍死するやうなおそれもない、明朝になると、半里や一里は、何でもないが、今の自分の姿は、大ぶん疲れて居るので野營、さうだ、少しで手元の見える間にと其處にリュックサックを卸して、焚き附けの枯柴や、流木を集めて、火を焚きにかゝつた、豫定が豫定だから山刀(ナタ)を持たない、薪を拵えることが出來ないので、困難したが、一心になつて骨を折つたら、漸く焚きつけることが出來た、紅々とした焰を上げて火は燃えた。

あたりはすつかり暗くなつてしまつた、殘りの飯を明朝一食分だけ、殘して食つた、石の上に腰を据ゑて、煙草をふかし乍ら、夜の明けるのを待つことにした、まだ暮れたばかりだのに、熊、猿、猪、原始人、そんな事を考へつゞけた、頭の上の岩壁がひつくり返らねばよいがなどゝ考へて見た、とても眠くていたし方が無くなつたのに、一盛り火は燃えたが、消えかゝつたので、一心になつて焚きつけた、そして地圖を出して今來た道の事を案じた、獨り合點で此處は煙瀧谷の奥で、先がた通過した大瀧が、煙瀧であると決めたが、翌日實地を下つて見て、非常に方面が違つて居て、煙瀧谷に出るには、まだ金木戸境の尾根を、一里も傳ふて下ら

ねばならぬこと、此の地點は、弓折谷より、まだ奥に指した椹谷（サハラタニ）と彦八谷との間の本俣であることなど分つて、今更乍ら、此の下佐谷の奥の廣く深いと云ふことに驚かされた次第だつた、迚も眠くて、いたし方が無いので、其の岩の角にもたれて、まどろむだ、暫くで目がさめると、寒い、何時頃だかさつぱり分らぬ、空には星影一つ見えない、火は消えてしまつて居る、これが夏であつたら、火を焚かないで居る處だが、寒さが增して來るので、如何ともすることが出來ない、人間は火を焚く動物なりとの定義を下した學者がある相だ、自然の姿には、火はない、森も、林も、谷水も、岩石も、熊も、雷鳥も、焚火はせない、否焚火をすると逃げるのだ、私は此の靜寂な境に、物皆と共に火を焚かないで、一夜を明かすことが、どんなに自然に親しみの深いことであらうと考へさせられた、そして火を焚くことによつて、却つて周圍の自然から、自分をして特殊のものたらしめ、所謂さびしいと云ふ氣分が募るのを覺えた、併し到底火がなくては寒さを凌ぐことが出來ない、凍死する樣な心配は更に無いにしても、身體がブル〳〵震へ出した、燐寸の棒が五六本殘つて居るのを幸に、先程の燃え殘りについて居る炭や腐朽の乾いた所を、爪で搔きむしつて焚きつけを拵えて置いて、順次に大きな枝を積み重ねて、一番上に大木を乘せ、そして燐寸で火をつけた、眞黑闇の中で、命がけの仕事だつた、努力は酬いられて盛に焰を上げて燃える、まことにうれしい心持になつて、あたつて居た、何だが、人に話がして見たいと思つた、どうも一人は淋しいと思つた、大きな欠伸をし乍らも、何時夜があけるだらうと思つた、それと今一つ心配が出來た、それは今積上げて居る薪を燃やしつくすと、これを補充する方法がない、此の薪を焚いて終ふのに、凡そ何時間位かゝるだらうかなどゝ考へながら、向ふの山端を見たら、薄ら白くなつて來た、月夜ではないがと思つて、谷の上を見渡すと、河原の石が見え出した、そして夜が明けたのだと心附いた時に限りなき喜びを感じた、明くれば十月十日だ、思ひがけない一夜を過ごして、

夢心地で起きて出た、何れ誰かゞ見たら、自分の顏は昨夜の焚火で、眞黑くなつて居たゞらう、ズボンも洋服も、灰だらけになつて居る、極めて冷い谷水で顏を洗つて、かたちばかりの朝食をした、なつかしい思ひを岩屋に殘して、五時に立つた、累岩と岩樋の緣を傳ふた、フト岩から岩に飛んだ拍子に、靴の金具がすべつて、ざんぶと谷の中に落ち込んだので、非常に寒く震へて來る、谷を下るに連れて、兩岸が廣くゆとりを示して來る、彦八谷の水を合せて、椹谷の合するあたりは、耕地でも出來相だ、檜や栂や樅に楢、栃などの喬木が茂つて、空を蔽ふて居る、弓折谷の合するあたりは、河流の相も最早成年期になつて居て、迚も深い淵がいくらでも續いて居る、約半里程下つたと思ふと、其處の溪の中、一杯に楢の榾木が積まれて居て、軌道の終點が其處であつた、鳶竿をかついだ人夫は、今仕事に向ふ處であつた、小原節などを歌つて、小屋を後に山道を登りつゝある其處へ、ヒョッコリ異樣な風をした自分が表はれたので、不思議相に立つて、自分を見て居るものもあつた。

もうすつかり谷は開けて、廣々とした野原だ、笠谷とくらべると、此の谷は一帶に兩岸が開けて居て、おとなしく出來て居る、此の邊から高原川に注ぐ溪谷には、蒲田奥の穴毛谷が最も急峻で、次が笠谷、最も下流に落口を有する下佐谷が、一番山相が溫和だ、反對に流域の廣いことは、下佐谷が一番だ、軌道の終點に立つて來し方を仰ぐと、たゞ半腹以上は、雲に隱されてゐる、大きな栃の木の黃葉が、谷間を塞いで居る、ハゼや漆の紅葉が、群綠の間に魁けて、櫻も半ば色づき、此處も頭の上迄、秋景は迫つて來て居る、五六丁下ると、官行事務所があつたので、早速立ちよつて、來意を告げると、非常に優遇して下さつて、衣類はすつかり脫いで、焚火でかはし、食事を給せられたり、殊に其處の炊婦らしい人が、大きな火を焚いて、暖めて下さつたのは、何よりうれしかつた、一時間餘り休養して、すつかり元氣も出て來たので、厚く禮を述べて歸途に就いた、密雲固く垂れて居るから、全容を見渡すこと

は出來ないが、如何にも物古りた河原に、豐富な水量が流れて居ることや、トロッコ道が、まだ上流に一里以上延びて居ることなどから考へて、非常に奥深いものであると云ふ感じを起さしめる、盛秋の裝は今しばらくと云ふ處だが、稚木や灌木は、黄に、紅に、山裾をめぐつて居る、所々に露出する水成岩の化石は、笠谷のものと同一のものが多い、緩やかな勾配の軌道を機關車が、トロッコ十五六を引きづつて谷口に出て行く、煙瀧谷の落ち込む少し上流で、橋を渡ると、其の後谷の右岸に沿うて入口迄來るのだ、脚下に流れる溪谷を眺め乍ら、そして時々後方を顧みては、或は水簾の懸るを眺め、或は紅葉の美はしさに魅入り乍ら、十二時に近く縣道の分岐點迄出た、事務所からは二里半、笠の頂上からは六里以上あるだらうと思はれる、君が歸る迄、漸く耐へて居たとでも言ふ樣な雨模樣であつた。

山梨縣對靜岡縣小富士及富士山頂爭奪戰評論

富士山は、言ふまでもなく駿河甲斐に跨がつて、裾には、兩國の村落がまつはつてゐるので、とかく國境問題が、やかましいやうだが、その紛爭は、既に明治三十二年頃から始まり、今日では、小富士から、八合目以上、絶頂迄の、領分爭ひにまで擴大して來てゐる、最近の事の起りは、山梨縣で、小富士山頂を同縣の行政區域に在るものとして、縣人某に土地を貸し、山小舍建築を許可したのに對して、靜岡縣側では、古來傳統的に此の地域の管理は、駿東郡須走村で掌つてゐると抗議し、山梨縣では、元祿裁許圖に依つて、富士山頂から富士郡に向つて、山の西側の境界爭ひに、嘗て靜岡縣と法廷に爭ひ、勝訴を得た判決を基とし、今回は、その反對の東側に及ぼさうとする意圖を有するものゝ如く、明治四十四年御料林を、山梨縣に引き繼ぎに際し、帝室林野局より、交付せられた同局作成甲州富士林業圖を取り出し、小富士頂上の三角點から富士八合目「大行合」の見通し線を以て、判然縣境とせられてゐることを以て、證據としてゐるが、更に甲州側淺間神社宮司が發見した古文獻に依つて、往昔頂上は、大日岳が駿河、藥師岳が甲斐側に屬し、山梨縣大石村の山名主が、之を管理したので、現に明治二十五年頃までは、山梨縣側が、道路修理に當つたことを、實證せられると論じてゐる。

然るに靜岡縣側の主張に依れば、小富士の山小舍問題が起つてから、須走村（靜岡縣）當局並びに村民一行が、登山して、實地調査を行つたところ、小富士の中腹に、深澤村や須走村施主（せしゅ）と刻まれた石碑四本を發見、問題の地域は、元御殿場町深澤（當時深澤村）の、大雲院の末寺の寺領であつたこと及び明治二十五年舊曆七月、登山者六名の慘死者があつたとき、山梨縣側では、この邊の土地は、靜岡領だから、始末は靜岡側でしろと突つ放し、靜岡縣側で、一切の後始末をつけ

たことは、當時の關係文書に依つて動かすことが出來ない、又大正八年、大雪崩があつて、須走口仁平山から、小富士へ掛けて大木が折損したときも、靜岡縣側で之を始末し、沼津御料局出張所で拂ひ下げをしてゐる、現に當時の拂ひ下げ人、及び伐採の人夫が生きた證人として、殘つてゐる等の、生々しい事實を列擧して、抗爭に務めてゐる。

孰れにしても、今のところ、未だ裁判沙汰とまでは進行してゐないが、兩縣共、山林課長たちが、證據固めに、奔走してゐるらしく思はれる。

この問題は、登山者にも興味のある問題だと思はれるから右、係爭に關する記事を、山梨縣側、靜岡縣側、と、二つに分けて、左に羅列して見る、尤も多少の重複は免れ難い、それから、この記事を裁り取つたのは、主として東京日々、及び東京朝日の山梨版、及び山梨日日新聞等で、山梨側で發行された新聞であるため、山梨側の記事が多いが、併し記述は、大體公平であると思ふ。

又山梨縣「鳴澤村外四ケ村恩賜縣有財産保護組合事業概要」（昭和八年七月刊行）には、沿革篇に、駿甲國境評論に關する（一）延寶二年の裁許狀（二）元祿十四年國境評論の事（三）元祿十五年の裁許狀（四）寶曆五年の御巢鷹山並駿州往還道下評ひの事（五）寛政十二年境界の判明願、外十二章の、國境や村境に關する評論裁定等の記錄があつて、頗る有益な史料である、筆者は今井徹郎氏と聞いてゐる。

以上の資料を纒めて、私に提供されたのは、在甲府の日本山岳會員、大澤照貞氏である、こゝに感謝の意を表する。

（小島）

一、山梨縣側の主張

小富士山頂はこちらの物

明治四十四年前に遡り縣當局はかく語る

〔縣境爭ひ〕昨報、靜岡縣駿東郡須走村から異議の出た小富士頂上の縣境爭ひは縣山林課が谷村出張所に命じ調査を進めてゐるが、

明治四十四年帝室林野管理局から御料林引渡の際、富士八合目と小富士頂上との見通し線を以て縣境とすることに決定

してゐるもので最近に至り大宮淺間神社から『往古より小絶頂(頂上より少しく下方)と唱へしところに神社を建て祭祀し碑石を建設して崇敬して今日に至つた旨』記載ある古文書が發見されたのでこれを證據として須走村で問題視し縣境を小富士頂上から前記の小絶頂を經て富士八合目を見通す線に變更を力説するに至つたものとされてゐるが決定はなか〳〵むづかしい模樣である、右につき野村縣山林課長は語る。

縣から頂上の土地を貸付けて家屋建築を認可したのは縣有地として承認したからである、折角當方で調査中だが決定はなか〳〵むづかしい、土地の利用價値があがつて來たので慾を出してきたものであらう、靜岡縣側で調査するなら同時に立會つて調査に當つてもよいと考へてゐる。

(昭八・一〇・一二東日山梨版)

解決の鍵は一つ行政裁判の結果

小富士山頂の縣境爭ひ

別項、小富士山頂の縣境爭ひは結局行政裁判所の判決による解決の外はなく、再び先年と同樣の爭ひが開始されるものと見られてゐる、大體市町村境界が爭ひとなつたときは當該縣知事が裁定をする權限をもつてゐるが、もしその町村境が縣境になつてゐる場合は知事は內務大臣に申請し、內務大臣から爭ひのある兩縣知事の一方を指定して裁定させ、その裁定に不服のある時は行政訴訟を起す事ができるもので、今度の場合もさうした手續きをとる事にならう、この前の爭ひは、大正四年から足かけ六年にわたる行政裁判でやうやく本縣の勝訴となつたが、その時は富士山頂から富士郡に向つて山の西側の境界爭ひで靜岡は太田資時辯護士、本縣は岸清一博士を代理人としてしのぎを削つて爭つたものだ、當時の專理評定官は現第二部長の三宅評定官で實地檢證に行つて太田辯護士が裸踊りをはじめたのに引きずり込まれて、三宅評定官も裸踊りをやつたので富士山の爭ひよりその方が有名だつた。

この裁判に一番役に立つたのは『元祿裁許圖』で評定官の事實認定とこの地圖がぴつたり符合し、判決理由書にも『元祿裁許圖による本縣の裁定が正しい』ことを認めてゐる、今度爭ひとなつたのはそれとは反對の富士の東側、前の爭ひの時にもちよつと持ち出されたことがあつた位で山梨縣としてはずつと以前からねらつてゐた所である、結局行政裁判を仰ぐことになればその際もやはり元祿裁許圖のような有力な古文書があれば事實認定の上に最も有利であらう。

(昭八・一〇・一三東日山梨版)

林野局で交付の林業圖が證據

縣では强硬に主張

〔縣境爭ひ〕もつれる小富士頂上の山梨、靜岡兩縣境爭ひにつき縣山林課では明治四十四年御料林引つぎに際して帝室林野局から交付された同局作成に係るすゝけた甲州富士事業區林業圖を取出しこれが動かぬ證據であるとし、これによつて問題の個所を縣有地として取扱ひ土地貸付家屋の建設を認可したものであるから縣の處置は正當であるとなしこれでも誤りあるとすればそれはむしろ帝室林野局の誤りであると强硬に主張してゐる、右林業圖は明治四十一年帝室林野局の境界査定官吏が實地踏査して縣境を決定し圖面には調査員として同局技師長岡三之進氏外三名の技手、製圖員として取田技手の名が列記されてゐる、小富士頂上三角點から富士八合目『大行合』の見通し線をもつてはつきり縣境とされてゐる、たゞ問題の小絶頂と稱するところは現在沙漠の如き地帶であるため見わけがつかないので決定はなか〳〵むづかしいとされてゐる。

（昭八・一〇・一四東日山梨版）

富士山恩賜林で靜岡縣が異議

靜岡縣地方課長來縣

縣では南都留郡福地村小富士附近から富士山頂上に至る間の恩賜林を地元保護組合に小屋がけ敷地として貸與したところ靜岡縣須走村から靜岡縣の地域だとて本縣當局に異議を申し立てた。

二十九日床次同縣地方課長は、野村山林課長、山内地方課長を訪ひ本縣側の主張を聽するところあり、再調査する事になつた。

（昭和八・一一・三〇東朝山梨版）

富士山の縣境爭ひ

八合目以上も本縣分と淺間宮司が文獻發見

明治三十二年頃から山梨、靜岡兩縣で係爭中の富士山の縣境爭ひは最近小富士へヒュッテ建設の認可問題から再燃し縣當局は山麓南都留郡福地村役場及び縣社富士淺間神社等につき抗爭材料集收中であつたが最近羽田社司が神社の文獻により從來靜岡縣分とされた八合目以上も本縣側に權利のある事を發見近く縣へ報告されることとなつた。

同氏の研究によれば往昔頂上は大日岳は駿河、藥師岳は甲斐で所領時に交互にこれを主管した事もあり頂上に山梨縣側も入會權のあつた事明かでかつ八合目以上の道路修理は山梨縣大石村の山名主がこれを管掌その結果は明治維新後も二十五年頃までは縣側が道路修理に當つた事により實證山の境界線は慣例からみても頂上から麓へ縱に定められる

を例とするに徴して八合目以上にも當然本縣側に權利があるといふのでこれに對し靜岡縣が如何なる態度に出るか興味をもつて見られてゐる。（昭九・一・一九東朝山梨版）

富士山頂奪取

山頂支配の事實を古文書で立證しようと

吉田口で奔命靜岡縣へ掛合ひ

富士山八合目以上頂上に至る地籍が靜岡縣分である所から、吉田口の地元にあつては往古右は本縣に於て、支配した事實があるので數年來靜岡縣と山梨縣の兩縣に於てこれが爭奪が行はれ、種々の文獻その他證據物件の蒐集に專念してゐる折柄去月拾參日縣山林課員が福地村役場に出張右打合せをなし、更に馬力をかける事となつて同村の堀内組合長が奔走した結果昔河口湖畔大石村が八合目以上を支配し道路の改修並に頂上お鉢まわりを四文の料金で許してゐた事が判明し古書類の發見に全力をあげる事となり、本年の登山期までには何とか具體的に靜岡縣へ頂上奪取の交渉を開始する事となつた。（昭九・二・二二山梨日日新聞）

頂上問題で對抗

靜岡縣との境界爭ひに

例の富士山國境問題は、靜岡縣が小富士境界の有力資料を發見本縣へ挑戰しようとしてゐるので、本縣でも小富士とは別に過去參拾餘年間に亘り繫爭中の頂上境界問題を一擧に解決、この決定に依り小富士問題をも有利に導かんものと數日前縣農商課土屋技師は福地村の國境調査委員會を訪れ過般來同委員會に依り發見された幾多の資料につき再調査を行つたが、八合目以上の所有權問題には相當自信を得た模樣である。（昭九・七・二五東朝山梨版）

二、靜岡縣側の主張

小富士山頂は山梨か・靜岡か

縣境爭ひ持ち上る

【靜岡發】富士山をめぐつて山梨と靜岡と縣境爭ひが持ち上つた小富士山頂は古來靜岡縣駿東郡須走村で管理してゐたのを最近山梨縣では小富士山頂を山梨縣の行政區劃範圍にあるものとして山梨縣人大沼某に土地を貸し家屋建築を許可したのは縣境を侵したものだから縣の境をはつきりしてくれと杉山須走村長から十日靜岡縣當局へ願ひ出た、縣でも捨て置けないと近く現地踏査の上もし須走側の主張通りなら山梨縣當局へ嚴重な抗議をすることになつた、右につき靜岡縣地方課首席鈴木屬は語る。

近く實地踏査の上態度を決するが何しろあの附近は複雜してゐるからこれまで縣境がはつきりしてゐないとのことだから面白い問題にならう。（昭八・一〇・一一東日山梨版）

拔打的なやり方

縣境問題について憤慨する靜岡縣側

【靜岡發】富士山七合目の小富士頂をめぐる山梨、靜岡の縣境爭ひは既報の如く山梨縣側では明治四十年御料地拂下げの際明かに縣有地となつてゐると主張してゐるのに對し靜岡縣側の駿東郡須走村では古來傳統的に同村の管理區域になつてゐると主張して形勢は愈々激化し靜岡縣では地方、土木、山林の三課が合議の上山梨縣側の主張を覆すべく資料調査に取りかゝつた、右につき齋藤山林課長は語る。

元々小富士山頂一帶が御料地であつたので甲駿國境が確然としてゐなかつたもので兩縣當局が立會のもとに和議的に境界をはつきりさせようといふことになつてゐたのを山梨縣側が縣有地を一坪でも殖やせば縣の財産になるので拔打的に他人に貸したものだらう、勿論縣としても抗爭するが山梨縣側が御料地をせびり取つたか、どうかの問題だから帝室林野局との爭ひになりはしないかと思ふ。

（昭八・一〇・一三東日山梨版）

確たる證據發見と靜岡側頑張り出す

一擧に解決を企圖

【御殿場電話】富士山を繞つて甲斐駿河の國境爭ひ一事の起りは昨年九月山梨縣側が登山者誘致のため靜岡縣分とされてゐる富士山中腹の景勝地「小富士」へ石室を建設すべく地均し工事に着手する一方山中湖畔より小富士を經て須走口二合五勺へ出る登山道の大改修工事を始めたので、靜岡縣では須走口が寂びれるとあつて嚴重抗議、漸く工事は一時中止となつたが、

靜岡縣は八合目、小富士T一號の見通線以南が本縣分だといふに對し、山梨縣は八分目三角點T一號の見通し線以北が山梨縣分だと主張して双方譲らず。

問題は雪のため本年に持越しとなつてゐたが、靜岡側は雪解をまつて地元須走村當局並に村民一行が去月初め登山、實地調査を行つた所、

問題の「小富士」の中腹に「深山村小松彌太郎」「須走村總施主」と刻まれた石碑四本を發見

これに力を得て更に調査の結果問題の地域は元御殿場町深澤（當時深澤村）の大雲院の末寺の寺領であつた事及び明治廿五年舊七月七日埼玉縣北埼玉郡の人で六名が登山暴風に遭

ひ慘死した際山梨縣側が「此の邊は靜岡縣分だ」とて靜岡縣側が死體の取片付をなした事等の事實が古文書によつて判明、小富士の驛以南が靜岡縣分たる事確實となつたので數日前土屋須走村長が出縣陳情の結果、開山期中に一擧に解決すべく十六日齋藤本縣山林課長、床次地方課長、佐藤村長一行が來村登山最後の實地調査を行ひ山梨縣に對し直ちに交渉を開始する事になつた。

（昭九・七・一四東朝山梨版）

小富士から南は靜岡縣の領分だ

實地踏査で確證つかんだと

【御殿場電話】富士山中腹の景勝地小富士を繞つて靜岡、山梨兩縣の縣境爭ひは尖鋭化し十七日本縣山林課佐藤技師地元土屋、高根、須走組合村長菅沼技手一行は須走口から登山し、T一號より小富士を經て八合までの線に沿つて實地調査を行ひ十八日午後下山したが本縣側の主張が正しい事を實證し得たので直ちに解決すべく本縣より山梨縣に對し正式交渉小富士の線以南が本縣分なる事を主張し山梨縣側の認識不足をたゞし本縣の主張を貫徹する事になつた。

（昭九・七・一九東朝山梨版）

生き證人を得て靜岡から縣境交渉

【靜岡電話】昨年九月山梨縣が靜岡縣分と云はれる富士山中腹小富士へ山小屋建設工事に端を發した靜岡山梨兩縣間の縣境問題はその後遲々として進捗せず地元須走村では本年降雪前に解決せしむべく縣へ陳情し縣でもさき頃山林課佐藤技手が實地踏査を了し尙去る四日田中知事が富士登山の際も特に現場を視察したのに力を得た村當局はその後佐藤技手からの通知により證據證跡の蒐集に努めた結果左の如き材料が纏まつたので十五日縣へ提出した。

一、明治二十六年八月埼玉縣人五名が富士山で遭難死亡の際山梨縣よりの申出でにより須走村で處置した、當時の關係書類全部。

二、大正八年大雪崩の際須走口仁平山から小富士へかけて大木が折損これを大正十一年沼津御料局出張所で拂下げたが、その拂下げ區域の北部は現在山梨縣では山梨縣分と稱してゐるが沼津御料局出張所で拂下げた事實は明かに靜岡縣分である事を立證してゐるのでその關係書類全部。

等で尙第二項の沼津御料局の拂下げについては當時の拂下げ人或は伐採人夫が生き證人となるとも主張してゐるので縣でも近く山梨縣に向つて嚴重な交渉を開始する模樣である。

（昭九・八・二〇山梨日日新聞）

圖書紹介

邦譯チンダル

アルプス氷河・第一部　（岩波文庫　八二三―四　）
アルプスの氷河（主に科學的）（岩波文庫　八二五―六　）
アルプスの旅より　（岩波文庫　八八八　）
アルプス紀行　（岩波文庫一〇二九―三〇）

ジョン・チンダルの山岳關係の著述 "The Glaciers of the Alps" "Mountaineering in 1861" "Hours of Excercise in the Alps" の邦譯である。尤も三著中第二第三は少なからず重複して居り譯者は第二書の飜譯を「アルプスの旅より」に收め、重複してゐない殘りを「アルプス紀行」に收めてゐる。重複した章に於いても多少加筆の跡が見受けられるに顧みて、自分個人としては、第三書を臺本にして第二書で補ふ方がよかつたのではないかと考へるが、何れにしても、昭和七年春から昭和九年夏迄の二ケ年に餘る譯者の努力によつて、茲に、チンダルの名著を邦文に於いて、而も驚く可く廉價に手にすることが出來るに至つた事に就いて、譯者矢島祐利氏及び出版書肆は充分山岳人から感謝されるに値する。

翻譯者の言葉に從へば譯者は先づ科學者としてのチンダルに親しみ然る後に之等の著述を「科學者の隨筆」として興味深く受取つたものと解せられる。然し、今更ら謂ふ迄もなくチンダルその人は、學士院の會員だとかミカエル・ファラディーの後繼者だとか、輻射熱、史學、音響學等々の物理學上の貢獻をなした偉大なる科學者であつたとかいふと同時に、ワイスホルンの初登攀者、マッターホルン登攀の一先驅者として永久にその名を十九世紀登山史上に記錄せられる偉大なる山岳人である。從つてチンダルの書を飜く者は彼の此の二つの面を少くとも了解しうる者でなければならない。さう考へて此の飜譯を見ると矢島氏の筆は屢々「登山方面に於ける一つの貴重な文獻」としてのチンダルの著述の値打を正當に紹介してゐないのみならず時に誤つて傳へてゐる遺憾がない譯ではない。譯者の並々ならぬ勞力の程を考へる時此の事は特に殘り惜しい氣がしてならない。

以下發行された順序に從つて、氣のついた儘を若干拾つて見よう。

「アルプスの氷河・第一部」に「慰みに角笛を吹く者があつ

た」（二四頁）とある。之は勿論角笛ではなくアルプス名物のアルプホルンである。旅人の耳を慰めて五仙十仙と喜捨を受けるそのアルプホルンで長さ三間もある奴だ。でなければウェッターホルンの岩壁にぶつかつて、その反響が靈妙な音樂となつて歸つて來はしない。原文には明かに「アルパイン・ホルン」とある。

モン・ブランの頂上が「廣い畝」となつてゐる。（同上八八頁）といふのも「廣い尾根」と云つた方が判りが早い。此の類の破綻の例は一二に止らない。「クレヴァス」なども原語の方が判り易い。原語で判らない人は「割目」と飜譯しても氷河上の特殊の龜裂である「クレヴァス」の本體は明確につかめない。「カスケード」を「瀧」としたのも如何にも氷が迸り落ちて居るやうで不手際だと思ふ。同じ英語の「アイスフォール」が今ではより一般的に行はれてゐるから之をその儘使ふのが、一番いゝと思ふ。序で乍ら、チンダルの物程古くなると固有名詞にも山岳用語にも、今では使はないものが出て來ることが少くない。偶には原本の間違ひすらもない譯ではない。例へば三回目のマッターホルン登攀の所に「コール・ドゥ・ラ・フルカを登り、其處からマッターホーンの北面を點檢した」（「アルプス紀行」一三二頁）とあるのなどは明かにフルグヨッホに登つてマッターホルンの東面の點檢したものである。此の種の飜譯に際して單なる飜譯以上の困難が少からず伴ひ、種々注意を要する所以である。

「櫛の上の雪は風の作用で幾重にもなり、一種の蛇腹をなしてリスカム側へ突出してゐる」といふのはモンテ・ローザの鞍部からドゥフールシュピッツェへの瘠尾根の光景であるが（「アルプスの氷河・第一部」一三二頁）之は少くとも「櫛」を原語の儘「カム」としておくか又は「ぎざ〳〵尾根」とでも書替へ「蛇腹」を「雪庇」と訂正しない限り意味の通じやうがない。辭書が却つて飜譯の邪魔になる好適例であるが、譯者が多少山の文獻に親しんで居たならば、こんな失敗はなかつたらうと思ふ。

「チムニー」も「煙突」（「アルプスの旅より」二〇頁）でなく原語の方が判りが早くはないであらうか。

ランダからワイスホルンが「アルプス連峯の彼方にかくれてゐる」（同上四二頁）などは地形的に不可能事だ。二子山（同上・四六頁）は折角なら原語をとる。個有名詞だから本當なら「ツウィリンゲ」とするが、「カストール、ポルックス」と呼ぶ可きだらうが、「メンヒ」を「モンク」と呼びたがる英國式不遜さを容認しても、せめて「トゥウィンス」で止めて置く可

きだ。でないと「モンテ・ローザ」が「薔薇ヶ峯」となつて了ふ。

「アルプス紀行」では飜譯に一段の進境が見える。然しチンダル自身は此の十年の間に一層アルプスに親しみ、謂はゞ山岳人として一段と磨きをかけたのだ。そしてそれがその行文の上に明瞭に反映して居る。それだけ飜譯は愈々チンダルに置いてきぼりにされた感がある。「モンテラッチの椿事」の文章のやうに純粹に山岳紀行になると殊にその感が深い。然し乍ら、勿論、飜譯者にも二年の前と後とでは少なからぬ進歩がある。「畝」や「瀧」や「割目」は散見されるが、「櫛」や「蛇腹」は出て來ない。「アルプス紀行」で氣のついたもの二三を擧げれば「表面には深さ十吋か一呎ばかり一部分は新しく降つた雪と一部分は風化を受けて碎けた雪の層が、載さつてゐる」(「アルプス紀行」二六頁)といふのは原文を見ると落着いた舊雪の上に降つた雪が一部分は新雪の狀態の儘で殘り一部分は風化で舊雪に成りかゝり乍ら乘つて居るのである。之などは山の知識といふよりは英語の理解力の範圍に屬するかも知れない。兎もあれ、山とは必ずしも關係のない、飜譯自體から云つても、何れにしてもまだ相當こなす餘地があると思はれることの多いのは惜しい。

例へば「アルプスの氷河」で instinctive を instructive と取違へて(一〇二頁)ラウエナーが「教訓的」な敏捷さを示す場面などがあるが、之は有り勝ちの感違ひとしても、ピッケルが手から滑りおちて「體が思はず匍つて行」つたなどといふのは少し非道い。原文には made flesh creep とある。之などは餘り奇怪なので原本を繰つて見たのだが、「アルプスの旅より」の中は「マッターホーンの視察」の中に grass と glass を間違へて(一八一頁)「コップを靴で踏み碎きました」といふ所がある。而も譯者は卷末の附記中に「多少身振りの大きいところ——例へばマッターホーンの失敗のあとでコップを踏み蹂つて遣り場のない感情に安全瓣を與へたといふやうな——がないでもないが、著者はイギリス人のことであるからわれ〳〵から多少さう見えるのは實は何でもないことかも知れない」と書いて居るのだから一寸取り返へしが、つかない。チンダルは批評もよいが、せめて英語を正しく讀んで吳れと云ふかも知れない。又「アルプス紀行」の中には飜譯の疏漏から重大な——少くとも我々には——事態が惹起されてゐる。「若しも熟練や力や自己信頼といふものがアルプスに於いて鍛錬さるべきであるならば、それは案内人の居ない方が最もよく練習され、また進歩するものである」といふ

（一一八頁）一節にチンダルは「一定の範圍内では」といふ重大な但書を挿入して居るが、此の條件書が邦譯に缺けて居る爲めに宛も案内人の居ないのが、常に最も望ましいといふ風に受けとられ、チンダルの折角の注意深い記事が歪められて了つて居る。卽ちチンダルには良い山案内の指導が如何に修業の上に不可缺であるかは十二分に認めての上でかう云つて居るのであつて、如何なる意味でも山案内を排斥して居るのではない。「初心者を馬鹿にしたので初心者の罰を受ける」（同上一六〇頁）なども「初心者の犯す不注意に對して初心者並の罰を受けるのだ」とでもしなくては意味をなさない。然し私はもと〳〵英語の飜譯の適不適乃至巧拙に對して批評をする意圖で此の一文を草してゐるのでないからそう〳〵その例を取り出さうとは思はない。で此處では、ベル・アルプで普佛戰爭の進展を氣に懸け乍ら滯在してゐるチンダルの文章で「私の興味は絕えず戰場からの電信に依つて喚び覺された」といふ一節（同上一六五頁）で肝心の「戰場からの」が抜けてゐる爲めに何に興味が喚び覺されたのか一向判らなくなつてゐる點を擧げるに止めて置かう。

固有名詞の讀み方で氣のついた誤を指摘すれば、アガシズ、ヌーシャテロウ、ドルジリング、シャルモーズ、グルボン、ブルヴァン、マクナガ、マキナー等がある。特に右の中或る物は固有名詞の索引では正しく本文で誤つた儘になつてゐる點から考へて千仞の功を一簣に虧いた憾が多い。

最後に率直に私の感想を云へば譯者はチンダルの山岳紀行飜譯者としてはまだ充分の資格がないやうだ。英語は勿論のことだが「山」を了解する程度に山登りもして居なければチンダルの之等の本はこなせないと私は考へる。原書の寫し出してゐる實感は勿論極く表面的の事實すらも把めないからだ。「私は山へ登ることが面白くないとは考へないが一向登つたことはない。その點此のやうな山登りの紀行文を譯すには最も不適當な一人にちがひない」と「アルプス紀行」の附記に譯者も自ら書いてゐるが、チンダルの著述が山岳文獻中で押しも押されもしない古典である丈けに此の事は何としても重大な缺陷でなければならない。

一々譯文と原文とを對照した精密な批評でない私の觀察は謂はゞ一つの印象乃至感想に過ぎない。然し譯者の驚くべき努力と精進とを考へる時、私は此のやうな批評も何等か建設的の意味に役立つこともあらうかと考へ、一文を草した次第である。

（松方三郎）

「臺灣の山」と「千島の山」

兒島勘次著
「臺灣の山」　菊判、本文六二頁
寫眞四十九枚、地圖一葉、價二圓

長谷川清三郎著
「千島の山」　菊判、本文一〇八頁
寫眞、四十四枚、地圖二葉、價二圓

梓書房發行

或る山岳書の批評文の中に、山の本を書くことは、或る意味に於て、山を登ることよりも更に困難な仕事であると書いてあるのを讀んだ事がある。この筆法を眞似て言へば、山の本の批評を書くことは、山の本を作る以上に困難な仕事であるかもしれない。而も、この兩著の如き「山岳寫眞集」ともいはるべき本を、寫眞に關して全く素人の私の如きが、批評するといふことは殆んど不可能なことに近い。この文を書く前に、私は既に他の雜誌でこの二著に對する感想を述べて了つたので、重複の嫌ひはあるが、思ひつく儘に、私の感じたことを二三記述してみよう。

この二册は、體裁も等しく、發行の日まで同一で內容からいつても文字通り姉妹編であるが、而も、日本の極北と最南の地の山岳寫眞集であることが、偶然とはいへ、面白い對稱を示してゐる。而も、私の貧しい經驗から判斷することを許されるならば、千島と臺灣の山と風物とを、遺憾なく表現し盡してゐると言つて過言ではない。尤も、これを一册の本としてみる時には、裝禎など、もつと輕い感じのものゝ方が、遙かに內容に似つかはしくはないかといふやうな、缺點とも言へるものを擧げられないではないが、――特にいかつい感じの外箱はよくない――本の出來、不出來は別として、一夏の山登りの收穫としては（但し「千島の山」の方は、南北兩千島に亘つて各一夏づつ）申分ないと思はれる。何れも寫眞五十枚、紀文約百頁程のものであるから、もとより大著でもなく、特に優れた名文であるとも思はれないが、在來普通の山岳書の型を破つて、山岳寫眞集の感あるほど寫眞を蒐め、それに印象記的な紀行文を添へたところ、如何にも清新な感を與へる。而も總て著者自らの手になる寫眞であるから、終始一貫よく統一されてゐるばかりでなく、それぞれに個性の

通つてゐる。汽車は遂に Llyn Padarn と Llyn Peris の兩湖が連なる部にある Llamberis 村の停車所に着た、午後六時半である。

まだ明るいので村を一廻りし、南の方の小高い森の中に白く見えてゐる Victoria Hotel と云ふのに行つて一泊する、田舍風の宿屋で何となく呑氣だ、泊り客も十數人あり、食堂に行つて見ると運動服の儘出て來て居る人もある、London では戰後でも Ration で豆大のバタしかくれないのが田舍ではコテ〳〵とくれるもうれしい。

Llamberis は Wales の Chamonix と呼ばれてゐるそうだ、どこの土地にでもあることで、「日本アルプス」の類だ、與がさめる。

翌朝は曇天で甚だ心元ない天氣であつたが、此村から登山鐵道があるので Snowdon に登つて見ることにする、Hotel と Llamberis 停車場の中途にある登山鐵道の停車所に行く、此鐵道は軌幅二呎七吋半 Abt 式で平均傾斜五・五分の一、延長四哩四分の三で Snowdon の頂上に達するのだそうだ、毎年四月始めの Easter Holiday から運轉し始め、往復乘客が十人以上あれば發車するのだと云ふことだ。發車時刻の年前十時近くなつて停車所に集つたのが僕を加へて七人と男の子が一人即七人半である、十人にはならない、或若い乘客は通りの方に氣をつけて通行人があると小聲で Come on と云ひ乍ら杖で床をコツとたゝく、三四人の通行者は皆停車所の方に曲らず素通りした、最後にお婆さんが二人素通してとう〳〵おまじないは利かなかつた、そこで其乘客は他の客に七人半で十人分の乘車賃を拂つて登ろうではないかと相談してくれる、一同贊成なので驛長に話して汽車を出す事にした、驛長は出札口の中で何かコツ〳〵やつて居て中々切符を賣り始めない、約二十分も待つたがまだ切符を賣らぬので我慢強い英國人連もとう〳〵ドヤ〳〵と驛長室兼出札所に入り込んで驛長に一體何をしてゐるのだと聞くと、驛長さん先程から十人分の往復賃金を七人半で割ると一人前いくらになるか計算して

ゐるのだがどうしても計算が合はないのだと云ふ、それでは僕が計算してやらうと小學算術のおさらいをして一人前半人前と出してやつたが驛長さんどうしても合點しない、そこで僕はそんなら僕が金を集めてやるから切符を作れと云ふて皆から金を集め目の前に金を目のこ式に並べてやつたら始めて成程そうだと承知した、其鈍重さ加減には流石の御客連も一同で大笑ひ、英國人自身でも志片（シリングペンス）の計算には閉口することがあると見える。

一同漸く箱に乘込む、機關手は罐に石炭をつぎ足す、準備が出來る迄十數分間あるので、切符を賣つて重荷を下した樣な顏をして居る驛長を捕へて近所の地名の讀み方を敎へてもらう（それ等は最後に御目に掛ける）。十時四十分になつて漸く發車した。

石で疊んだ Viaduct を二つ渡ると左手に樹木の粗生してゐる Ceunant Mawr の谷を瞰下して登る、やがて左に瀧を見る、此瀧は上の方で短かく三段になつてゐるが三段目から急に右斜めに曲つて岩の裂目を流れ落ちてゐる、高さは約六十呎だと云ふ、水量の多い時は水が斜めの岩の上をあふれて斜に簾の樣に落るそうだ。瀧を過ると Waterfall station に着く、之れより鐵道の登る方向が南に曲る、昨日見た Carnarvon の無線電信社が見えて來る、右手に谷を距て Moel Eilio（二三八二呎）の頂が高く見える、谷から山に掛けての地肌は濡れた枯草が一面に伏して居て、溝から上つて來たドラ猫の體の樣であまり快感を起さない。Snowdon の頂上は一面の霧である、北風は尙も霧を山頂に吹き付けてゐる、十分の厚着をして來たのであるが寒さが著しくなつて來て耐えられない、汽罐車の火夫が羨しい、青い顏をして Llechog の斜面を登る、天氣ならば此邊から右手に Moel Hebog, Moel Llefn が見えると云ふことである、此日は何も見えない、やがて Llechog の肩二五二〇呎邊に達すると此邊から左手に Elidyr Fawr（三〇二九呎）及 Llanberis Pass が見えるのだそうだが一面の霧で何も見えない、Clogwyn Station に着く時分から汽車は全く霧の中を登るのである、いくら霧が深くとも衝

特徴を窺ひ得る點は成功であつた。と同時に、筆者の私見を以てすれば、この種の本は、思ひきつて寫眞を主體とし、記事は、それの説明として役立たせることにした方が、面白いと思はれる。少くとも、紀行の方は、獨立した紀行とするよりも、もつと寫眞の解説的なものとすべきであつたと思はれる。こゝに説明といひ、解説といつても、必ずしも植物學的な、地質學的なそれを意味するのではない。それらの地方に特有な、山岳の風物誌的な、又は風景詩的な、それである。尤もそうした形で一册の美しい本を纒め上げるといふことは尠なからぬ技倆を必要とすることであらうが。そして「附錄」とした行程や山岳一覽表なども除いて差支へなかつたと思はれる。勿論、これに忠實な案内書的な價値をもたせようとするならば別である。しかしこれらの著書の意企は、最初からそこにあつたのではあるまい。さうとすれば、書名「臺灣の山」「千島の山」といふのも、少し堅い感じがする。「臺灣の山旅」とでもした方が、よく内容を表象してゐるやうに思はれる。それから、これは、印刷技術上の問題ではあるが、寫眞版のインキの色の選擇が、殊にこの種の風景寫眞の場合は、なか〳〵重要なことだらうと思ふ。例へば「千島の山」の鯨濱漁場や後鍬岳などは、もつと冷い感じの出る色にした方がよかつたのではあるまいか。「臺灣の山」では、出來の惡い寫眞が二三目についたが、五百枚の中から選んだ五十枚とすれば、著者としては棄て難かつたのであらう。

さて、私は、今までに、かなり多くの千島の寫眞を見てゐるが、かつて、北千島に二ケ月間滯在して親しくその風景に接した經驗からして、長谷川君の寫眞ほどよくその氣分を傳へてゐるものはないと思つてゐる。これは「千島の山」の中の數枚が、いつかの關西學聯報告に出た時以來の意見である。如何なる名手と雖も、よく「千島の山」の壘を摩する逸品を創作することはなか〳〵容易な業ではあるまい。私は、臺灣の山と山登りの實際に關しては殆んど語るべき資格はない。今夏約二月、臺灣各地を旅行した折に、阿里山から八通關に新高山を越え、霧社から松嶺を經てピヤナン蕃部に出る山路を歩いた、唯それだけの知識ではあるが、臺灣から歸つて間もなく「臺灣の山」を手にし、そこに編まれた五十枚の寫眞が、完全に臺灣の山と山登りの實際を物語つてゐるのに驚きもし、又喜ばされたことである。言ふならば、この二册の本は、千島と臺灣の山の優れた風物誌であり、風景詩でもあるだらう。そこに、また、この二人の著者の、山や自然に對する鋭い感受性を窺ふことが出來、同時に又、そここゝに

横溢してゐる清新さ――恐らく著者らの若さからくる清新さに、喜びを見出すことが出來たのである。假りに、經驗を積んだ老大家が、同じやうな本を作るとしても、或は別の意味でより優れたものは出來ようが、果してこれほどの新鮮さを出し得るであらうか。私は、澄みきつた、圓熟の老境にも、愛敬と憧憬の念を禁じ得ないが、張りのある、熱情の青春にも、喜悅と同感の情をもつものである。その意味に於いても、これらの著書が、二君の、及び二君と同行された人達の、よき記念であることを信ずるものである。

（一九三四・八・三一）（伊藤秀五郎）

リュックサック　7　（1928―1934）

關東學生登山聯盟解消以後に於ける早稻田大學山岳部の業蹟發表である。本論二百十九頁、記錄百九十六頁と云ふ堂々たる、近來稀に見る部報である。その主要論文とも云ふべき穗高瀧谷登攀の業蹟は三ケ年（積雪期五回）に亘るもので、本邦登山史上に一偉彩をそふるべきものであり、報告の形式も全部の今迄に見る樣な非常に難解なる社會科學的な文辭なく、若人の純な、熱に燃ゆる所を率直に表し、しかも、あの瀧谷に、幾多の忍從、困苦よく、遂にその殆んど完登とも云ひ得べき發表を見るところ、早稻田山岳部に新人出でたると共に、又その傳統に一のエポックをつくつたとも、讀む者に思はしむるものがある。

積雪期の瀧谷登攀は主に槍平室堂から行はれ、冬、並びに早春季の天候惡き日の續く時にも尙よく目的貫徹の爲めに對自然的な、忍從、苦鬪を續け、遂に斯かる業蹟の發表にまで到つたのである事は、その部員の頑健な肉體と共に、また、極めて强固なる意志の力によりて始めて爲し得られるものであることを痛感せしむるものである。ことに瀧谷第三尾根、同第四尾根の登攀記を讀むに至つては、その部員の根强さを切に感ずる。只讀後の感として、小川氏の北穗高飛騨側なる文は、瀧谷飛騨側總論とも云ふべきものかと考へられ、編輯上最初に置くべきものではないかと思はれる。神の田圃は小屋建設の報告に初まり、『冬季の神の田圃小屋附近に就て』の地勢、天候、積雪狀態、雪崩、スキー・コース等の實際調査上の報告は、神の田圃のみならず、栂池ヒュッテを訪れるこれから多くの登山者に對して必讀の文であり、又『白馬岳國境尾根について』は、前文の補として、更に、神の田圃栂池

ヒュッテを中心に、國境の山々への登攀者に對して、親切なる注意文であり又指導標であると云ふべきであらう。

挿入寫眞につきては、日本の今日迄多くの山岳の寫眞中、實に白眉ともなすべきもの、百數十枚中より選出されたるものと稱するだけあると思はれる。一體日本には今迄、餘りに型にはまり過ぎた寫眞が多かつた。左もなければ、餘りにも主觀的な見る何人にも少しの感興、否、力を誘起するに足りない樣なものが多かつた。而し、今度のリュックサックに載せられた寫眞の多くは、いやに、眼を突く樣な、鋭さが躍つてゐるのを感ずる。これを見ると、寫眞も、實際に、撮影者が困苦に耐えて、然る後に始めて、その印畫にまでも、力と云ふものが表はれるものであるのを知るものである。安易な趣味とか云ふものから、玩具的にカメラを取扱ひ、自惚的な山の寫眞などを寫しても、それは何等の力のないものとなるのは當然の事である。斯かる輩が多い爲めにカメラに多くの贅澤稅金などを課せられる樣になるのである。

次に記錄として、尤も一九二八——一九三四年の記錄としては仕方もないかも知れないが、本論文に相照して、餘りに分量が多過ぎる感がある。別册として、何等かの形式で發表するか、或は、本論文に關係の深き、槍平生活、神の田圃小屋生活の記錄を附錄して、後は適宜に取捨して欲しかつた。尤も、山岳部の部報とすれば致し方もないかも知れないが。

最後に、體裁とし、表紙は地味な感じを持たせてゐる。使用の紙質が重過ぎると云ふ評判もあるが、實際に山に行く、若い人達にとつては、どつしりとした、重味のあるのが好かれるかも知れないし、又重いものを持つことは日常のトウレーニングの一つかも知れない。世の常として山に行く力の衰へた者こそ、小ウルサキ色々な理窟を云ひたがるものである。山に行くことはあくまで實際的の行爲でなければならないのである。

（額田　敏）

會報

會務報告

四月定例理事會

四月十二日　午後六時半　於本會事務所

出席、高頭、小島、冠、槇、松方、茨木、神谷、額田、逸見、飯塚、三田、三木、黒田、角田

一、山日記編輯の件（角田）

一、山岳第二十九年第一號報告（逸見、黒田）

一、會報印刷所變更の件（逸見）

一、會員優遇に關する件（黒田）

一、黒部保勝運動に關する件（冠）

一、山小屋視察に關する件（槇）

五月定例理事會

五月十日　午後六時半　於本會事務所

出席、高頭、冠、鳥山、槇、松方、茨木、津田、神谷、福島、額田、黒田

一、次回小集會の件

一、會報印刷所變更に關する件

一、關西在住理事に事務分擔の件

一、山小屋敷地視察のため六月上旬槇、額田、角田出張の件

一、新入會者の紹介者に對する入會挨拶の件

一、會計報告

六月定例理事會

六月十四日　午後七時　於本會事務所

出席、小島、木暮、鳥山、松方、茨木、神谷、額田、三田、逸見、黒田

一、山日記編輯報告（松方）

一、山岳第二十九年第一號發行第二號編輯報告（黒田）

一、三十周年記念の件（鳥山）

一、會計報告（神谷）

臨時役員總會

昭和九年七月二日　午後七時　於本會事務所

出席、高頭、小島、高野、中村、木暮、鳥山、槇、茨木、額田、飯塚、逸見、神谷、田中、黒田、（以下委任）近藤、松方、三田、冠、津田、三木、福島

一、山小屋建設地視察報告、並に是に對する今後の方針決定。

山小屋委員を代表して槇氏より視察の報告あり、右に關し愼重審議の結果『現地視察委員の報告に基き役員總會は審議の結果、涸澤小屋建設豫定地は雪崩の危險性ありと認め建設せざるに決議す』との決議をなし、報告書を公開する事とせり。(右報告書は、第三十七號會報の附錄として既に公表せり)

七月定例理事會

七月十二日　午後七時　於本會事務所

出席、高頭、槇、松方、茨木、福島、神谷、黑田

一、山小屋現地調査報告書の件(槇)

一、會計報告(神谷)

一、スキー日記の件(松方)

九月定例理事會

九月十三日　午後七時　於本會事務所

出席、高頭、松方、黑田、伊藤、飯塚、額田、神谷、田中、逸見

一、國際山岳協會聯合加盟ニ關スル件(松方)

一、第六十三回小集會ノ件(逸見)

一、山小屋建設後始末ニ關スル件(松方)

一、本年度新任理事候補者ニ關スル件

一、山岳第二十九年第二號編輯報告(黑田)

一、會計報告(神谷)

第九回關西小集會記事

昭和九年二月二十一日午後七時
大阪堂ビル　清交社にて

講演　山岳スキーの進歩に對し山岳家に警告す　高橋健治氏

映畫　冬の樺太及北海道、カナダスキークラブのジャンプスキー

講演概要　山に於いて如何にスキーを使用するか、ステムボーゲンとステムクリスチアニヤの用法、等漫談的講話あり。形だけのスキーを學ばずリズムとバランスに充分心懸けて練習すること、何々派スキー術などの流行に捉はれず、山へ行く爲めのスキーであることを忘れてはならない、そして自分に適應した滑り方を工夫すべしと結び、氷、岩の技術に及んで一時間餘である。

映畫　冬の樺太と北海道共に高橋氏の撮影せられたも

の、北海道の寫眞では高橋氏のスキーのホームをかなり丁寧に寫されてあり、前の話に關連して興味深く見る事が出來た。續いて會員二木信次氏の撮影せられたカナダスキークラブのジャンプの寫眞を映寫、同氏の懇切な說明があつた。（津田）

來會者氏名（順序不同）

前澤利成　西岡一雄　坂岡奈保志　山口季次郎
松岡靖一　服部鑛一　津田周二　高橋健治
頭井豐次郎　梅津猛　阿江正造　別所史郎
二木信次　阿部三郎　政友巖三　下川友記
宮崎武夫　藤木九三　下山勇　中村勝郎
影山寅造　永井俊三　大中彰一　米澤政吉
田中薫　中江喬三　石原正直　加納一郎
西口久一　外會員外四十二名

有志晩餐會記事

昭和九年四月五日
隅田川兩國橋側「二葉」にて

春秋二回に開く恒例の晩餐會を今度は柳橋の「二葉」で開催。遠來の珍客多く又初登場の會員の顏振れも賑かに稀に見る盛會であつた。次回の世話人は冠松次郎、黑田正夫、松方三郎の三氏と決定

世話人　茨木猪之吉
槇有恒
角田吉夫

出席者

高頭仁兵衞　藤田國馨　田邊主計　山崎春雄
伊藤秀五郎　山田多市　澤智子　岡埜德之助
松方義三郎　星野光之助　茨木猪之吉　酒井忠一
磯貝藤太郎　岡本勝二　大熊保夫　澤井德太郎
鈴木治孝　中司文夫　飯塚篤之助　冠松次郎
黑田正夫　松本菩二　吉田竹志　吉澤庄作
東良三　竹內亮　槇有恒　田中菅雄
角田吉夫　武田久吉　井田清　尾崎喜八
檜原良一郎　多賀富藏　木村一男　矢作太郎
加藤保二　渡邊達三　宇田川久太郎　櫻內敏雄
伊藤朝太郎　水野啓治郎　黑田孝雄

關西有志懇談茶話會記事

昭和九年五月十八日
大阪堂ビル清交社別室にて

關西に於ける會員の會合は年三回の小集會に止り、殆んど顏を合はせる機會がなかつた爲め、親睦會的な會合を希望せられる會員もあつたので、試みに何のテーマも持たない、そして各自大いに氣焰を擧げられる會合を催して見た。古い會員、新しい會員、遠くは姫路からも來會者あり、肩のこらない一夕を愉快に過す事が出來た。初對面の來會者も多かつたので先づ自己紹介、續いて各自の希望、意見、又は最近の山登りの失敗談等に花を咲せた。此の種の會合を少し宛趣きを變へて、二、三回續ければお互ひに親しみを增し、益々愉快な會合にする事が出來るだらうと思ふ。（津田）

出席者

石原正直　河本俊彥　大野英一　若城豐次郎
栗野英治郎　山村功　米澤政吉　西口久一
中原繁之助　影山寅造　中江喬三　加納一郎
宮崎武夫　坂岡奈保志　津田周二　杉岡靖一
杉山良平　大中彰一　山口季次郎　中村勝郎
兒島勘次　井上仙之助

第六十二回小集會記事

昭和九年六月七日午後七時半於三會堂

一、北米の山旅　東良三氏

小島久太氏の司會にて先づ東氏を紹介せられ、續いて同氏の講演にうつゝた。その講演の內容は、假題に示したアラスカのみではなく、一九一〇年より二十年間にわたる北米の山旅の追懷談であつた。氏の足跡は、キャスケイド、ロッキーからアラスカまで非常に廣く、從つて講演もそれからそれへと果しのないものであつたが、二時間に亙り、かなり詳細に伺ふことができた。終つて約三十枚の幻燈板によつて更に補足的の說明があつた。（黑田）

出席者

武田久吉　鈴木正俊　齋藤威三男　齋藤雄三
坂江善治　鈴木伊三郎　矢田城太郎　野口未延
荒井道太郎　丹羽憲　島田巽　槇有恒
坪山清太郎　新庄球生　田邊主計　鍋倉英夫
田代豐彌　菊池明式　山下助四郎　茨木猪之吉
岡本勝二　宇田川久太郎　淺原重繼　長沼重
飯塚篤之助　村尾金二　逸見眞雄　三浦新
酒井忠一　石塚秀次郎　三田幸夫　安田登茂次
岩崎京二郎　飛川維之　中司文夫　井上良則
千家哲麿　小原勝郎　堀田彌一　近藤恒雄
吉田竹光　角田吉夫　額田敏　小島久太
松方三郎　田口一郎　神谷恭　中屋建式
磯貝藤太郎　沼井鐵太郎　田中菅雄　西川信義
本多友司　黑田孝雄　會員外十四名

「山岳」投稿規定

一、投稿は何人も自由とす。日本山岳會員たると然らざるとを問はず。
一、原稿の採否は理事會に於て決定す。
一、原稿は返却せざるものとす。
一、別刷所要の向はその旨原稿に朱記せられたし、その費用は筆者の負擔とす。
一、原稿にはその梗概を付せられたし。
一、紀行には概念圖を添付せられたし。
一、寫眞は光澤印畫紙に燒付けられ度、裏面或ひは別紙に說明記入を乞ふ。
一、校正は編輯者に一任せられたし。
一、地名及び外國語は特に明確に書かれ度、地名には振假名を附せられ度し。

原稿蒐集所
東京市芝區琴平町一、不二屋ビル、三〇七號室
日本山岳會編輯所

原稿用紙所要の向は前記編輯所宛て申込みあり度し。

昭和九年十一月廿八日印刷
昭和九年十二月一日發行
〔定價金貳圓〕

發行所　日本山岳會
東京市芝區琴平町一、不二屋ビル內
電話芝一六四九番
振替口座東京四八二九番

編輯兼發行者　黑田孝雄
東京市牛込區市谷仲ノ町二八

印刷者　高田壬午郎
東京市神田區神保町一ノ三四

發賣所　東京堂
東京市神保町

廣告取扱所　進恒社
東京市牛込區富久町一四

株式會社開明堂東京支店印刷

有所權作著

日本山岳會々則

第一條　本會ヲ日本山岳會(Japanese Alpine Club)ト名ツク

第二條　本會ハ山岳ニ關スル科學、文學、藝術其他一切ヲ研究シ以テ健全ナル登山氣風ノ振興ヲ期シ且ツ會員相互ノ連絡親睦ヲ圖ルヲ目的トス

第三條　本會ハ前條ニ掲ケタル目的ヲ達スルタメ左ノ事業ヲ爲ス

(1)　機關雜誌「山岳」ノ發行、又時宜ニ依リ臨時又ハ定時ノ出版物刊行

(2)　其他登山者ノ爲メ適宜ノ事業

第四條　本會ハ毎年大會及小集會ヲ開ク

第五條　本會ニ左ノ役員ヲ置ク

會長一名、副會長若干名、評議員十五名以内、理事十五名、監事二名以内

第六條　會長ハ本會ヲ代表ス　但シ會長ニ事故アル場合ハ副會長之ニ代ル

第七條　會長及副會長ハ役員總會ニ於テ役員ノ内ヨリ之ヲ推薦ス、會長及副會長ノ任期ハ三ケ年トス　但シ役員トシテ任期滿了シタル場合ハ會長副會長トシテノ任期滿了前ト雖モ交替スルコトアルヘシ

第八條　評議員ハ本會ノ重要會務ヲ審議ス

第九條　評議員ハ本會發起人ノ總テト元役員タリシ會員中ヨリ評議員會ノ推薦セル者ヲ以テ之ニ任ス　發起人以外ノ評議員ノ任期ハ三年トス　但シ重任ヲ妨ケス

第十條　評議員ハ互選ヲ以テ常任評議員若干名ヲ選任ス

第十一條　常任評議員ハ評議員會ヲ代表シテ會務ニ參與ス其任期ハ三年トス

第十二條　理事ハ別ニ定ムル細則ニ依リ候補者中ヨリ會員ノ投票ヲ以テ之ヲ選任ス其任期ハ三年トシ、理事定員數ノ三分ノ一ヲ毎年改選スルモノトス

但シ引續キ重任スルコトヲ得ス

第十三條　監事ハ評議員會ニ於テ會員中ヨリ之ヲ推薦ス其任期ハ三年トス　但シ重任ヲ妨ケス

第十四條　役員總會ハ評議員、理事ヲ以テ組織ス

第十五條　役員總會、評議員會及理事會ノ議長ハ會長之ニ當ル　但シ會長ニ差支アルトキハ副會長之ニ代ル

第十六條　役員ハ任期滿了後ト雖モ後任者ノ就任スル迄ハ其

任務ヲ行フモノトス

役員ニ缺員ヲ生シタルトキハ前各條ニ依リ夫々之ヲ補充ス補缺役員ノ任期ハ前任者ノ殘任期トス

前項ノ場合ニ於テ特ニ補缺ヲ必要トセサルトキハ次ノ改選期迄之ヲ行ハサルコトヲ得

第十七條　役員總會、評議員會及理事會ハ會長之ヲ招集ス

第十八條　役員總會ハ役員二分ノ一以上評議員會ハ評議員二分ノ一以上理事會ハ理事二分ノ一以上出席スルニ非レハ議決ヲナスコトヲ得ス

第十九條　役員總會、評議員會及理事會ノ議決ハ出席者ノ過半數ヲ以テ之ヲ定ム可否同數ナルトキハ議長ノ決スル所ニ依ル

第二十條　役員ハ總テ無報酬トス　但シ其職務ノタメ必要ナル實費及旅費ヲ給與スルコトアル可シ

第二十一條　本會ハ會員ヲ分チ左ノ三種トス

一、通常會員　會費年額六圓ヲ納ムル者

二、終身會員　一時金百圓以上ヲ納メタル者

三、名譽會員　役員會ニ於テ推薦シタル者

右ノ二、三ニ該當スル會員ハ爾後會員籍ヲ有スル間ハ會費納付ノ義務ナキモノトス

第二十二條　本會々員タラントスル者ハ會員二名ノ紹介ヲ以テ申込ムモノトス、入會許可ノ通知アリタルトキハ入會金五圓ニ會費ヲ添ヘ拂込ムモノトス　入會許可ノ通知アリタル後一ケ月以内ニ右ノ手續ヲナササル者ハ入會ノ許可ヲ取消サル可シ

第二十三條　入會ノ許否ハ理事會ノ決議ニ依ルモノトス

第二十四條　本會會則ノ變更ハ役員總會ノ決議ヲ以テ之ヲ定ム

第二十五條　前條ノ決議ハ役員三分ノ二以上出席シ其出席者三分ノ二以上ノ同意ヲ得ルコトヲ要ス

第二十六條　本會ハ適當ト認ムル地方ニ支部ヲ設クルコトヲ得支部規則ハ役員總會ニ於テ之ヲ定ム

細則

一、會費其他ニ關スルモノ

(イ)　會費ハ毎年二月末日迄ニ納付スヘキモノトス

(ロ)　毎年一月一日ヨリ八月三十一日迄ノ入會者ニ限リ其年度ノ會費ヲ二ケ月間延納スルコトヲ得　但シ此適用ヲ受ケントスル者ハ其旨入會申込ト同時ニ申出ス可シ

(ハ)　毎年九月一日以後ノ入會者ニ對シテハ其年度ノ會費ヲ免除ス

(ニ)　本會ハ會員ニ會員章ヲ交付ス會員章ヲ紛失シタルモノ

ハ實費ヲ以テ再交付ヲ受クルコトヲ得

（ホ）本會ハ機關雜誌「山岳」ヲ毎年發行シ毎號一部ヲ本會會員ニ頒布ス　但シ毎年九月一日以後ノ入會者ニハ頒布セス

（ヘ）毎年九月一日以後ノ入會者カ其年度ノ雜誌「山岳」ノ頒布ヲ希望スルトキハ更ニ一ケ年分ノ雜誌代ヲ納ムルコトヲ要ス

（ト）本會會員ハ別ニ定ムル所ニ依リ本會所藏ノ圖書ヲ閲覽スルコトヲ得

（チ）會員ニシテ退會ヲ欲スルトキハ其旨事務所ニ必ス書面ヲ以テ申出ツヘシ

（リ）會員ニシテ本會ノ體面ヲ毀損シ又ハ會費納付ノ義務ヲ怠リタル者ハ理事會ノ決議ニ依リ除名ス

（ヌ）本會ハ既納ノ金品ヲ一切返付セス

（ル）團體加入者ノ代表者交付シタル場合ニハ新舊兩代表者ノ連署ヲ以テ代表者變更届ヲ提出スヘシ

（ヲ）本會集會室及圖書室ヲ東京市芝區琴平町一番地不二屋ビル三階三〇七號室ニ置ク

（ワ）海外旅行其他ノ理由ニヨリ十二ケ月以上、三十六ケ月以下ノ間不在トナル場合ハ、會員ハ其ノ理由、不在期間等ヲ詳記シ、取扱手數料金貳圓ヲ添ヘ事務所ニ届出ツル事ニヨリテ、不在會員ノ取扱ヲ受クル事ヲ得、此場合ニハ不在期間ハ會員章ヲ返納スルニ及ハス、會費納付ノ義務ナキモ本會ノ出版物ノ頒布ヲ受クル事ヲ得ス

二、理事選擧ニ關スルモノ

（イ）理事定員十五名ノ内三名ハ之ヲ關西在住ノ會員中ヨリ選任ス

（ロ）役員總會ハ理事改選又ハ缺員補充ノ際ニ會員中ヨリ候補者ヲ推薦スヘキモノトス

（ハ）會員中十名以上ノ推薦ニヨリ會員中ヨリ一名ノ候補者ヲ擧クルコトヲ得　但シ一候補者ヲ推薦シタルモノハ他ノ候補者ヲ推薦スルコトヲ得ス

（ニ）理事候補者タルヘキモノハ入會後滿三ケ年ヲ經タルコトヲ要ス

（ホ）團體ノ代表者タル資格ニ於テ會員タルモノハ候補者タルコトヲ得ス

（ヘ）候補者ノ氏名ハ豫メ本會ヨリ全會員ニ通知シ投票ヲ求ムルモノトス

（ト）候補者ノ數カ改選又ハ補充セラルヘキ定員ノ數ヲ超過セサルトキハ投票ヲ要セサルモノトス

（チ）改選ノ際五名ノ内一名ハ關西在住ノ理事トス

（リ）投票ハ記名連記投票トス

The Journal of the Japanese Alpine Club

SANGAKU

Vol. XXIX 1934 No. 2